



テキスト分析の研究

— 日・独テキストの対照研究を中心に —

研究課題番号 60301065

昭和62年度科学研究費補助金(総合研究A)
研究成果報告書

昭和63年3月

研究代表者 脇阪 豊

岩手大学人文社会科学部

テキスト分析の研究

—日・独テキストの対照研究を中心に—

1988

は し が き

本書は昭和60年度から62年度までの3年間にわたり、文部省科学研究費補助金をうけてなされた、表題の研究の研究成果報告書である。

本研究は、補助金申請にさいして「研究分担者」として参加した、代表を含む14名の研究者の他に、より広い範囲に亘る「研究協力者」の協力を得て行われた。ちなみに、昭和60年度の新規申請における「計画調書」の「研究計画・方法と研究経費」の項で、研究分担者会議に加えて、研究協力者会議、つまりそれ以前の過去4年間に亘る夏期言語学ゼミナール参加者を中心とする研究者の共同研究の組織を明確に位置づけている。これは、どのような共同研究にあっても、ある特定の限られた人数の集団が単独で仕事をするには、現代社会での情報の交換と作業遂行の実際が余りにも複雑多岐に亘っているとの認識に立ったゆえである。一見効率よく運営されるかにみえる、閉ざされた研究集団は、その実つねに自己満足的結論に至りやすい危険を孕んでいる。現代社会においては、開かれた研究組織は、研究倫理的意味においても、また運営上の技術的面においても、強く要請されている。私たちは、この3年間に亘り、可能な限り広い範囲に亘る活動を目指した。例年の研究集会を同じ場所に固定しなかったのも、そのひとつの現われである。

このような現実認識のもとで、私たちはつねに言語研究がどのような社会的意味をもつのか、またもつべきなのかとの問いを念頭において私たちの仕事を続けてきた。この共同研究の基盤のひとつである「夏期言語学ゼミナール」(巻末「研究記録」参照)の出発時において、私たちの共通の標語として *Gesellschaftliche Relevanz der linguistischen Forschung* を挙げたことを敢えて記しておきたい。これは決して、言語研究の成果が、社会的実践に具体化されることのみを意味するのではない。むしろ、言語についての考察と研究が、どのような形で理論的次元と実践的次元の間で相互に検証しあいうるかを問うこと、つまり一般科学論の基本問題として、現代社会における知的営為そのものの意味をたえず問いつづけることをも意図している。

いうまでもなく、これに関わる考察に直ちに形を与えようとするのではなく、個人のそして共同の作業にさいして、その都度に反省契機として働くべきものが、上記の標語である。開かれた共同研究の実践を意図したことは、そのひとつの、そして重要な契機である。このような意味において、多くの研究協力者の活躍が共同研究の推進のために大きな力となったこと、そして本書の成立にさいしても、「研究分担者」以外の、とりわけ新進の研究者諸氏の寄稿が得られたことにたいして、感謝の意を表しておきたい。

本書に収録された18篇の論文は、巻末に付けた研究会記録に示されている、いずれかの集会で討議されたものとの関係している。しかし、本書に収めることが出来なかった、多くの個人の仕事と、その都度の集まりで討議された内容の多くが、ここに形をとらないままに残されている。これらの内容の個々のテーマについては、以下18篇の論文が示すところであり、またその大きな流れは、「序論」としてまと

めた通りである。

さいごに、この3年間の研究遂行に当り、多くの事務的部分を処理して頂いた、岩手大学人文社会科学部の関係事務職員の方々、および資料整理や通信文・資料の発送などに、献身的に協力してくれた学生諸君にも、ここに感謝の意を表しておきたい。上述の如く、開かれた研究組織の運営には、目にはみえてこない、多くの繁雑な事務処理がとりわけ多いのである。(協阪 豊)

研 究 組 織

研究代表者	協阪 豊	岩手大学人文社会科学部	教授
研究分担者	川島 淳夫	独協大学外国語学部	教授
	下川 浩	独協大学外国語学部	教授
	松村 保寿	金沢大学文学部	助教授
	泉尾 洋行	同志社大学商学部	助教授
	藤井 文男	岩手大学人文社会科学部	講師
	能登 恵一	岩手大学人文社会科学部	助教授
	植田 康成	広島大学文学部	助教授
	海老沢君夫	岩手大学人文社会科学部	助教授
	小林 英信	岩手大学人文社会科学部	助教授
	菊池 武弘	立教大学文学部	教授
	大滝 敏夫	金沢大学文学部	教授
	植木 迪子	北海道大学文学部	助教授
	日置孝次郎	岩手大学人文社会科学部	教授

研究協力者 (本書に論文を寄稿した者のみ)

伊藤 良子	学習院大学	博士課程在学
宝福 則子	北海学園大学	非常勤講師
大矢 俊明	独協大学	非常勤講師
四反田 想	長崎大学	教養部講師
高橋由美子	上智大学	外国語学部助教授
吉田 光演	琉球大学	法文学部講師

研究経費	昭和60年度	4,100千円
	昭和61年度	2,800千円
	昭和62年度	1,400千円

なお、規定により研究分担者の「研究発表」の報告をもあわせ記載することになっているが、編集の都合上、巻末に挙げる。

目 次

は し が き

序論・テキスト研究の展開と課題	協 阪 豊	5
-----------------	-------	---

I 方法の考察

テキスト分析の経験的研究

——テキスト受容行為、コミュニカート形成プロセスの分析——	大 瀧 敏 夫	11
疑問文、質問、返答	植 木 迪 子	23
テキストにおけるアド・ホック構成の理解	植 田 康 成	31
Modalwort と情報構造	大 矢 俊 明	43
テキスト分析の方法——とくにテキスト機能をめぐって——	川 島 淳 夫	55

II 実践の試み

対話性とテキスト

——戯曲の対話分析の試み（Brecht, Kroerz を例に）	吉 田 光 演	65
説教話になった庶民本『オイレンシュピーゲル』		
のいたずら	高 橋 由 美 子	77

Textsorte, Wissensrahmen と文体分析

——E. Alberus の『婚姻の良き書』について——	四 反 田 想	89
インタビュー資料の分析——「1900年から1933年までのブラウンシュヴァイクにおける 労働者の日常生活」を手がかりに——	宝 福 則 子	103
文学テキストに現われる現在形について	伊 藤 良 子	117
日・独テキストにおけるテーマ展開の思想——結束性をめぐって——	能 登 恵	131
日本語の「指示詞」とドイツ語での対応		
——テキストの文脈形成の対照——	協 阪 豊	143

III テキストと文化

ドイツ語の詩とその日本語訳について

——ヘルダーリンの“Hälfte des Lebens”をめぐって——	海 老 沢 君 夫	159
異文化間の文学批評について(上)——小林秀雄の『私小説論』批判	小 林 英 信	175
「文化コンテクスト」についての基本的考察	日 置 孝 次 郎	187

IV テキスト処理

モンタギュー文法による省略形の意味論的分析

——ドイツ語のテキスト分析のために——……………泉尾洋行…………… 201

談話の機械的処理の際の問題点……………下川浩…………… 213

テキストの機械処理……………松村保寿…………… 227

付 録

研究会記録…………… 249

昭和60・61・62年度研究分担者 研究発表記録…………… 254

序論・テキスト研究の展開と課題

脇 阪 豊

言語が具体的に発現するのは、テキストのレベルにおいてはじめて可能となる。この共通の認識が、私たちの共同研究をその当初から貫く一本の赤い糸である。これはまた、いうまでもなく、言語をコミュニケーションの場で捉えようとする方法論上の基本的姿勢ともなる。

偶然的とも見える現実の諸現象に、ある種の必然的な底流が共有されているのを見いだすことがあるのは珍らしくない。1964年、当時まだその名称すら殆ど知られていなかった雑誌 *Bogawus* がミュンスター大学の言語や文字そして芸術に関心をよせる数名の学生たちの手で刊行された。その創刊号（1964年5月）で S.J. シュミットが、芸術作品の「構成的要素の回帰性」konstitutive Rekurrenz に注目するとき、その芸術性を見失うことなく記述し分析できる、と述べている(12)。このように主張する彼の言語についての見方は、「名称 Name に意味的位置価が付与されるのは、テキストの中においてである」(13)という主張にも示されている。ここでのテキストとは、話者の言語使用によって形成され、更にこの言語使用はコミュニケーションを前提とする対話者間における「期待の地平」Erwartungshorizont への依存度に応じて、発現の諸相（例えば「日常的」、「詩的」など）を示す、とされている(14)。

いままじこの同じ雑誌について記すことが許されれば、やはりその第2号（1964年6月）に発表された、P. ハルトマンの「テキスト、諸テキスト、テキストの諸クラス」と題される論文を挙げねばならない。この、いまでは Textlinguistik の古典的論文とみなされている論文で、著者は、「表現された言語が観察可能であるとするなら、それはいかなる場合でも TEXT となっている」(Koch 1972: 3) と記している。つまり、わたしたちが対象としてとりあげ、記述できる現象としての言語は、どんな場合でもテキストでしかないのである。いずれにせよ、仮に言語の構造そのものを追及しようとするにしても、わたしたちはまずテキストとしての言語から出発しなければならないだろう。

当時まだミュンスターで勉学中の24歳の S.J. シュミットと、おなじ大学ですでに言語学の教授であった P. ハルトマンの2人が、ひとつの雑誌の5月号と6月号に相ついで共通の発想にもとづくテーゼを発表している。そしてこの1964年という時点に注目するとき、かたやハルトマンはその労作『統辞論とその意味』の第1巻をまとめ、他方で H. ヴァインリヒの『時制論』の初版が出ている、という事実が思いだされる。そしてその翌年、H. クロイツァーの編集になる『数学と詩』が刊行される。

ここでは、1960年代半ばの「テキスト」をめぐる研究状況にこれ以上立ち入ることは控えよう。ただ、テキスト研究をめぐるおよそ25年に近い時間の流れに、注意を喚起しておきたいと思う。

1960年代後半から70年代にかけてのいきいきとした研究活動は、決して書斎のなかでの仕事のみではなかった。例えば、1969年の「レーダー覚書」の発表に至る熱気につつまれた討論の意義は、言語研究と文学研究の根本的な方法論上の相違を確認することで、改めて両者の実践的協力関係の可能性と必要

性を強調したところにある。「Germanistik, Anglistik, Romanistikなどの個別的フィロロギーは、言語学と文学研究という共通分野にとって代られる」(改革の一般的テーゼ)との主張は、いくつかの大学において実行に移され、またギムナジウムのカリキュラムにもとり入れられた。たしかにこのラディカルな提案に対する反対も強く、また時代の変貌は、1970年代の間にこの覚書の趣旨の制度的実践の後退をも余儀なくさせた。だが、いま私たち日本の大学や高校の教育の実情と比較するとき、たとえ制度的には貫徹されなかったこれらの主張(学際領域の学習計画と一般言語学・一般文学理論との結合:言語(学)・文学研究の教授法を研究分野にとり入れること:言語の対照研究など)が、それぞれの関係分野では現実にとり入れられ、かつ教育と研究の分野で着実に進展しているという西ドイツでの事実を見おとしてはなるまい。

さて、たとえばこのような「レーダー覚書」にみられる諸テーゼが、その後どのような具体的な形をとって実現していくかの一例を、雑誌TEXTの仕事についてみると、それはこの分野での研究進展の概観ともなるだろう。

1981年、T.A. ファン・ダイク(アムステルダム)とJ.S. ペテフィ(ビーレフェルト)の2人を編者として刊行された雑誌TEXTの、創刊号の冒頭に、この雑誌のプログラムが示されている。ここでは、近來の人文・社会科学の両分野に亘って、言語の談話レベル、言語使用、コミュニケーションに関する研究が次第に増加していることが指摘され、「テキスト」の観点のもとでの学際的研究の促進の必要性が示唆されている。そのさいの具体的なテーマのリストアップは以下のようである:言語学(テキスト文法の構築)、詩学・修辞学・文体論(談話の普遍性)、心理学と心理言語学(人工知能・談話の認知的表象と理解のモデル)、文化人類学(発話の民俗学的考察)、社会学(日常会話における相互行為・制度化された環境での談話の類型)、マス・コミュニケーションと社会心理学(影響関係の基本的メカニズム)、心理療法(医師と患者の間の会話と相互作用)。

このように列挙してみたのは、この列挙そのものにそれぞれの意味を認めることから、さらに進んでそうした視野の拡大の上でたとえば一つのテキストについての考察の方法の多様さを認め、それらを統合できる立場の可能性を具体的に示してみたかったからである。

テキスト言語学そしてテキスト分析は、ほぼこの頃から新しい展開の段階にはいったとみてよいだろう。「60年代の末から爆発的な進展をみせたテキスト言語学は、膨大な数の研究をもたらした」と、W. ドレスラーが書いたのは1978年であるが、テキスト研究の視点の精密化、理論的深化と実践の促進はその後一層著しい。それはまたひとり西ドイツに限られていない。R.de ボウグランド/W. ドレスラーの『テキスト言語学入門』(1981)は、英語圏とドイツ語圏の2人の学者の共同作業であるし、O.I. モスカスカヤの『テキスト文法』は、1981年モスクワでの刊行にひきついで、1984年にDDRで独訳されている。これは、東欧圏での一つの例でもあるが、東ベルリンの科学アカデミー「言語学中央研究所」のシリーズ *studia grammatica* は、すでに多くのテキスト言語学関係の特集を編んできている。言語と社会の関係をとりわけ重視する学問的基盤のもとで、このシリーズの第25巻『文・テキスト・言語行

動』(1987)では、文をこえてテキストに至る言語使用の実際を、コミュニケーションの視点からとらえようとする諸論文が収録されている。ここでは、すでにドイツ語として定着している「表現内行為」illokutiver Aktにたいし、illok. Handlungの用語を用いて、いわゆる発話行為理論の拡大を計ろうとする意図がみられる。例えば、対話の「故障」Störungを、「現存が認められる」場合と、「可能な故障」とに分けて、後者での「予測」Antizipationの問題にまで考察を進めようとする試み(E. Gülich/Th. Kotschi ibid: 249 ff.)などがそれである。「予測」の問題は、コミュニケーション一般の問題であるとともに、今後のテキスト分析にさいしての、重要な課題となるだろう。私たちの日常会話においても、「パートナーの意図の先取り」はさまざまな形で行われているし、また修辞法的にみれば、「先取り」を誘い出す話術も当然のこととして用いられている。演劇のテキストは、それらの例を多く提供してくれているが、日常会話における実例との対比のもとでの、E.W.B. ヘス=リュッティヒ(1981, 1984)やA. ベッテン(1985)らの仕事が注目される。

言語の多層かつ多面的な発現を重視し、それが研究にも反映されるべきであると説いた一人に、K. ビューラーがいる。その『言語理論』(1934)が1960年代に改めて評価され、その後次第に多くの研究者に影響を与えつつあるのは、既述のようなテキスト言語学の進展と無関係ではない。静的な記号の体系としての言語ではなく、記号のダイナミズムを強調したビューラーが、とみにコミュニケーションにおける言語の機能を重視したのであれば、現代テキスト記号論への手がかりをその『言語理論』のうちに求めようすることは重要なことであろう。彼の言語の3機能の原理が、プラーク学派における「言語の詩的機能」への基盤となったことについては、すでに多くの言及がある。そしていまテキスト記号論はテキストにおける「詩的特性」Poetizitätの考察、文学記号論、演劇の記号論、物語り性研究などの諸分野で進められ、それらは他方で映画やコミックスあるいは絵画など芸術諸ジャンルの記号論、さらには広告テキストという、とりわけ現代的な多面的文化現象(もちろん広告には、狭義の文化という領域を越える面もあるが)などにさまざまにかかわりながら、すべては「テキスト性」の追求に向っている、と言えるのではないだろうか。W. ネートの『記号学ハンドブック』(1985)はこれらのパノラマを提示して見せてくれている。

このようにみえてくるとき、本書に収録された諸論文がとりくむ分野は、「テキスト」に関する可能な研究領域のごく一部にすぎないことが明らかである。また、ここに収録できなかつたものも含めて、私たちの共同研究そのものが、まだまだ部分的であり、かつ方法的にも試みの性格が強いことも認めねばならない。しかしながら、私たちの仕事が、仮にいわゆる「文学テキスト」を扱う場合であれ、また「日常言語のテキスト」を取り上げる場合であれ、少なくとも従来からの個別言語圏内の仕事にとどまっていた「文献資料学」Philologieの視野をこえて、より統合的な「ことば」の現象考察に向おうとしていることは認めて頂けよう。ちなみに、私たちのプロジェクトの出発においてたてた研究目的は、「多層的かつ多面的な言語形成とその受容の実態を明らかにする」とされている。そのさい私たちがたてた具体的考察方針は、①文分析とテキスト分析の方法論的接点、②テキスト形成と語い構成の関連性、③テキスト現実とテキスト文体との関係、④言語テキストと言語外テキストとの相互干渉の4方向を念頭に

おいてたてられた（「昭和60年度総合研究(A)計画調書」より）。

言語の多層かつ多面的な発現のさまは、異なる言語の比較・対照を通じてより一層その実態に近づきうることは、すでに言語研究の歴史が示すところである。そしてこの理念は、テキストの次元での考察が方法的に具体化されることで、これまでは潜在的であったものも顕在化される段階に至ったといえよう。つまり、たんなる形態的な対照研究にとどまらない、テキスト生成と受容についてのダイナミックな把握と記述が可能になり、同時に言語と言語外テキストとの関係についての認識を一步進めうることになった。本書のいくつかの論文では、日・独両言語テキストの比較が試みられ、その結果がなんらかの形で文化コンテキストとの繋がりをも射程のうちに含むことになっている。

言語の研究が未知の言語との出会いによって大きく促進されたことは、数多くの実例が示すところである。そしてその際、母語とは異なる言語を知りかつその習得をも目指した努力が、言語研究の方法そのものの開発に貴重な貢献を果たしたことも事実である。このようにみると、異なる言語の比較考察と、外国語の習得に関する考察とは、そもそも言語研究の応用部門ではなく、むしろ基礎研究の一部を形づくっているとさえいえる。テキスト研究は、このような意味で、言語研究の制度的次元での再編成を求めているともいえよう。

たしかに、あまりにも外的ないし附随的条件が多くかかっている、教育という場での外国語習得には、言語習得の考察にさいし純粋に理論化したまたその実践を試みることを妨げる諸要因が多すぎるほどあることは事実である。わたしたちの共同研究においては（巻末の研究会記録が示すように）、外国語習得の問題にも可能な限りのとりくみがなされた。しかし、残念なことにとどまった形として本書にその成果を提示しうるには至らなかった。わたしたちがそれを無視しているのではなく、むしろ今後の課題としてその展開を期したいと思う。とりわけ、欧米文化圏から遠くにある地域における外国語習得のためには、それなりの独自の方法が求められるべきである。ヨーロッパの古典語学習から発した外国語学習の方法は、今ようやく新しい可能性に到達したといえるのではないだろうか。制度上の不備を改善するにも、堅固な理論的基盤の上にたてられた実践プログラムが必要なのである。たとえば、1964年「時制」の持続性に着目することで、テキスト性画定へのひとつの可能性を開いたH. ヴェインリヒは、その後20年近いテキスト研究の実践を経て、1982年に『フランス語のテキスト文法』の大著を世に送った。ここでは「今迄知られてきた非テキストの形をとった文法記述に対するひとつの対案 Alternative」として、「言語についてよく考えてみようとする読者」が求められている(23)。第2章から第9章迄の文法記述が *Kongruenz : Genus und Numerus, Zwischen Nomen und Verb : die Textrollen, Verb, Artikel, Adjektiv, Adverb, Junktion, Gespräch* のそれぞれのテーマについてすべて *Syntax* で統一されている発想は、「テキスト意味」を問うことを目標におきながら、テキストの時制形式を *Syntax* の視点で統一的に追究した『時制論』からひきつながれている。いまヴェインリヒは、さらにまた、新しい構想の下でドイツ語の文法を執筆中であるが、ここでもコミュニケーションの視点のもとでのテキスト文法が目ざされることは間違いない。

いまドイツ語圏での、新しい文法書にとりくむ計画は、マンハイムの研究所IDSを初め、なお他にもあるときく。こうした新しい試み、それらは今世紀前半での「機能」に着目した言語理論が、いまようやく「学校文法」の分野で体系化されることになった、という大きなまとめを許してくれるのではないだろうか。とすれば、母語に関して、そして外国語に関して、言語習得の教育的実践の、方法的開発は、まさにこれからの問題といえる。いや、その同じ方向での模索はすでに少なくない人びとによって行われている。そしてコミュニケーションの視点の下でのテキスト産出・受容そして加工の実際の理論化と体系化はそれらの実践と手をたずさえて進んでいる。おそらくそのよき伴侶は、心理学の分野での研究であろう。本書での18篇の論考が、少しでもこうした進展に寄与し、かつあるべき「ことばの世界」（それは「人間の世界」に外ならない）のさまを明らかにすることになれば、私たちの大きな喜びである。最後に、私たちの仕事の未熟な部分への危懼ないご批判をお願いして序論を閉じさせていただく。

文 献 表

- Betten, Anne 1985 : *Sprachrealismus im deutschen Drama der siebziger Jahre*. Heidelberg (C. Winter)
- Bühler, Karl 1934 : *Sprachtheorie*. Leipzig (1965² Stuttgart G. Fischer)
- de Beaugrande, R.-A./W. Dressler 1981 : *Einführung in die Textlinguistik*. Tübingen (Niemeyer)
- Dressler, Wolfgang ed 1978 : *Textlinguistik*. Darmstadt (Wissenschaftliche Buchgesellschaft)
- Gülich, E./I. Kotschi 1987 : Reformulierungshandlungen als Mittel der Textkonstitution. Untersuchungen zu französischen Texten aus mündlicher Kommunikation. In : *studia grammatica* 1987
- Hartmann, Peter 1964 : Text, Texte, Klassen von Texten. In : *Bogawus* Heft 2/Juli 1964. auch In : Koch 1972
- Koch, Walter A. 1972 ed : *Strukturelle Textanalyse*. Hildesheim/New York (G. Olms)
- Kreuzer, Helmut 1965 : *Mathematik und Dichtung*. München (Nymphenburger)
- Moskalskaya, O.I. 1984 : *Textgrammatik*. übers. u. hrsg. v. H. Zikmund, Leipzig (Bibliogr. Institut)
- Nöth, Winfried 1985 : *Handbuch der Semiotik*. Stuttgart (J.B. Metzler)
- Hess=Lüttich, Ernest W.B. 1981 : *Soziale Interaktion und literarischer Dialog*. Berlin (E. Schmidt)
- 1984 : *Kommunikation als ästhetisches Problem*. Tübingen (G. Narr)
- Reder Memorandum 1969 : Memorandum zur Reform des Studiums der Linguistik und der Literaturwissenschaft. In : J.Kolbe (ed), *Ansichten einer künftigen Germanistik*. München (C. Hanser) 1969.
- studia grammatica* XXV 1987 : *Satz, Text, sprachliche Handlung*. (W. Motsch ed) Berlin (Akademie)
- TEXT* an interdisciplinary journal for the study of discourse. (ed von teun a. van dijk / jános s. petöfi) 1981ff. Berlin/New York/Amsterdam (Mouton de Gruyter) : Editorial introduction (volume 1-1).

Weinrich, Harald 1964: *Tempus*. Besprochene und erzählte Welt. Stuttgart. (Kohlhammer, 1971²)

——— 1982: *Textgrammatik der französischen Sprache*. Stuttgart (Klett)

Bogawus. Zeitschrift für Literatur, Kunst und Philosophie. (hrsg. v. D. Gerhards, S.J. Schmidt)
1964 ff.

I 方法の考察

テキスト分析の経験的研究

——テキスト受容行為、コミュニカート形成プロセスの分析——

大 滝 敏 夫

0. はじめに

テキストと言っても、この使用には二種類ある。我々が、一般にテキストと言っているのは、物理的コミュニカート基盤（K基盤）のことであり、本来「テキスト」が成立するのは、その基盤を生産し、受容する、その行為においてである。私はテキストという概念を後者の意味で使用する。従って、ここで言うテキスト分析は、K基盤に基いて受容者（又は生産者）が見いだすテキストの結束構造、結束性を分析することになる。K基盤に基づく Thema-Rhema 構造や物語構造などの分析は、従って、研究者の見いだした一結束構造、結束性であって、それ自体で完結するものではないと考える。受容者が現実のK基盤にそれらの構造をいかに実現して行くかを見ることこそがテキスト分析となるのではないだろうか。それには、経験的研究方法が有効であると考ええる。マトゥラナが科学者（言語学者）の陥り易い誤謬を次のように指摘しているのも注目に与えしよう。「1. 科学者は組織体の相互作用で頻発するパターンを観察する。2. 彼はその規則性を特徴づけるようなある形式表現（たとえば生成規則の集合や「図式」）を案出する。3. その組織体はその規則性を示すことが出来るように、その表現を「具えている」と仮定する。4. 科学者はその表現の存在を示すような実験を探したり、それをういた計算機プログラムを設計して、観察された行為がプログラムによって生成されるか否かを調べる。科学者の過ちはこのステップ3で表現を具象化するところにある。」その辺を明らかにするために、まず1. コミュニカートの概念を説明し、しかる後、2. 私が行ったテキスト分析の経験的研究、および、3. ドイツでの文学理解の経験的研究を述べて、テキスト研究の一寄与としたい。

1. コミュニカート形式プロセス

コミュニカートについて述べるに当たっては、先に、生物学者マトゥラナの構成主義的認識論の中心をなす autopoiesis の考え方と認知心理学の理解過程に言及しておこう。

1. 1. Autopoiesis :¹¹⁾ マトゥラナによれば、生物有機体は、人間を含めて autopoietisches System（自己生産的組織）であり、インプットもアウトプットもない組織的に閉じた円環的なネットワーク・システムである。そして要素を生産する要素が、円環的な因果ネットワークによって再帰的に自己にかかわり、自己を再生産し、かつシステムを維持するよう組織されている。行為がその系における他の行為を次々に引き起こして行く要素からなる神経系システムであり、どの行為もそれが起った瞬間の構造（または状態）によって完全に決定されるという意味で構造決定的である。その構造は行為によって

変化し、その結果どの瞬間における行為も、行為と変化してきた構造との過去の履歴全体の所産である。その行為は、システムが知覚する外部世界の反映として理解されない。即ちある情報を理解するという場合、外部世界の情報は、そのまま伝わるのではなく、意味を与えようとする能動的な認知システムを刺激し、行為を生み、システムの変化を来し、それが自己再生産的に意味付与するのである。このことが後に述べる構成主義的テキスト理論のコミュニカートの土台となっている。つまり一般にいうテキストは物理的基盤にすぎなく、受容者（または生産者）が、それに自らの自己生産的意味付与（コミュニカート形成）を行うときにテキストが成立するのであり、テキストの諸情報も、その基盤に自己の意味を付与して、つまりコミュニカートを形成することによって理解されるものである。従って、いかなる認知、理解も主観的であって、客観的なものは存在しない。強いて客観性を求めるとすれば、間主観性であることを指摘しておきたい。

1. 2. 認知心理学による理解過程：認知心理学およびテキストの理解過程については、私の論文「テキストの受容行為の経験的研究」の中で、詳しく論じているので参考にして戴き、ここでは、その論文での誤りの訂正を含めて、簡単に述べることにする。

言語の認知と再生には、記憶が大きくかかわっている。（記憶という概念には固定的なイメージがあるが、「様々な機会に喚起されるような環境世界の表象の貯蔵庫としての記憶は、神経生理学的機能としては存在していない」（Maturana : 62）とまでいうマトゥラナに倣えば、ここでは記憶とは呼べないもっと動的な、常に変容するものを指すと考えて欲しい。）記憶には短期記憶と長期記憶があるが、ここでいう記憶とは長期記憶を指す。記憶には大きく分けて、4つの層があり、次の順序で発達する。1. 感覚運動的記憶 2. 内閉的記憶（過去の経験を象徴的に変容し、現在進行形で呼び戻すタイプ。例、夢） 3. 社会的記憶もしくは陳述の記憶（心的統合のタイプ）。時と場所に関する文脈上で、回想イメージを再構成する。単なる記憶の復元的再生ではなく、主体個人的論理及び社会的論理を通した、過去の事象の再構成である。4. メタ記憶（評価的呼び戻しタイプ）。現在自分がとっている行為や思考を監視し、それを評価し、正確性・連続性・一貫性・正常性を全うするように、自己を制御する。認知的モニタリングあるいは認知的調整機能といえる。（認知心理学講座 2 : 13-19）この4つの層は階層的というより重層的である。これを1. 下位段階、>4. 上位段階とすると、上位記憶層が解体されても下位記憶層は解体されないが、下位記憶層が解体されたら上位記憶層も解体されている。1. 2. の自動性の次元では、記憶の再生に先立って、何ら再生している意識も時間意識もない。習慣や自動性は、意識が身を引くとき成立する。3. 4. の心的統合の次元では、1. 2. の上に立って、思考や推論が意識的に働く。

我々言語学者が文法を研究するとき、これらのどの段階で扱うかによって当然扱い方が違って来るはずである。テキストの結束構造、結束性はテキスト生産行為及びテキスト受容行為において成立するとすれば、社会的場面性を抽象化して、結束構造、結束性を研究する一方で、テキストの認知過程を考慮に入れたそれらもなければ、片手落ちとなろう。第3段階の社会的記憶の欠如した失語症段階の文法も必要であろうが、正常の人間のコミュニケーションは、常に社会の慣習に基づく相互行為であり、純粋に慣習を除いたレベルの文法は、机上のものに過ぎないのではないかと懸念するものである。

認知科学は知識が記憶の中でいかに組織化され、認知過程においてそれがいかに文章理解につながりをもつかに注目し、スキーマ、スクリプト、フレームの概念を導入し、知識の組織の仕方を明らかにしようと試みた。スキーマは、対象、状況、事件を、典型的経験に基づき概念的に写し取ったものである。例えば、Thorndyke 1979, Kintsch 1977, van Dijk 1980らのテキスト言語学者は、「物語スキーマ」を、van Dijkは「論証テキスト」、「科学テキスト」のスキーマを明らかにした。しかしスキーマが最低限どの程度存在するのか、テキスト理解にどの程度機能するのかは確かめられていない。また「物語スキーマ」にしても「論証スキーマ」にしても、他のテキスト種類、例えば会話テキストにも指摘されることからすれば、固定スキーマとして決定出来ないのではないか。次の知識組織形態スクリプトは、ある状況における典型的な行為や事件の一連の手続き的経過をいう。例えばレストラン・スクリプト、歯科医スクリプト (Schank & Abelson 1977) などである。しかしSchank自身言っているように、「記憶の中に歯科医スクリプトなるものは全く存在しない」(ジャンク：151)²⁾ あるとしても、苦痛とか珍しさとかの一般化された出来事記憶であるという。最後に、フレーム (Winograd 1977 参照) は、自由な推論の余地を統一的に含む、慣習的に規則化された社会的な世界知を指す。(私の論文「テキスト受容行為の経験的研究」では、状況を決定する慣習に適当な概念が見付からず、慣習スクリプトとしたが、不適當であり、S.8以下はフレーム³⁾ むしろ「慣習」と読み替えねばならない。)しかしマトウラナの言うように、生命システムが自己生産的であり、環境世界からの作用に自己の諸状態に関する情報のみで変容するのであれば、記憶が貯蔵庫として固定的に蓄えられているとは言えず、知識の組織形態としても確定されない。テキスト理解もまた自己生産的構成のプロセスとしてとらえ直す必要がある。

1. 3. コミュニカート形成プロセス：Schmidtを中心にした「経験的構成主義の人々は、意味にかかわるプロセスの出発点として、社会的脈絡における社会化された個を採る。換言すれば個の認知領域とは、環境及び文化的諸制度や伝統というコンテキストに存在する他の社会化された個との相互行為の中で、意味が生産され、処理され、創造的に補完される場なのである。」(シュミット 1986：183) コミュニケーションは、情報の交換ではなく、相互に交信しあう個体の認知領域で平行して行われる情報構成である。情報が送り手から受け手へ移動されるのではない。認知領域において、——例えば自然言語のような慣習化された「触発装置」に準拠して——相互の方向指示行為を通じて、情報が先ず構成されるのである。(同：185) 一個体が自己の認知領域で、触発装置としてのテキスト、つまり物理的基盤を基にして展開する認知操作の総体を、Schmidtはコミュニカート (Kommunikat) と名付けているのである。このことはテキスト理解においても同様である。受容者 (または生産者、加工者) が物理的基盤としてのテキストと (相互) 行為する場合、テキストの情報が受容者に移行するのではない。自己の認知領域で情報が構成されるのである。つまりコミュニカート形成である。従って、一般に言われているテキスト分析は、テキスト理解のコミュニカートの一形態である。それに対して、構成主義的テキスト分析は、テキスト理解のコミュニカート形成プロセスを研究対象にする。またそのテキスト理解のモデルは、コミュニカート形成プロセスとして、理論的に記述されると想定している。コミュニカート形成プロセスの特

徴を Schmidt は次のようにまとめている。(ここでは重要と思われる事項のみ抜き出すことにする。)

- コミュニカート形成のプロセスは、実生活の中で、より大きな行為のなかに埋め込まれている。(1)
- コミュニカート形成のプロセスは、部分プロセスを階層的に組織し、統合する、ひとつの包括的なプロセスである。そのプロセスは次の3領域に分析出来る：個体の意図や情報による自己方向づけと、自己省察の理性的領域；情動的領域；コミュニケーションプロセス、およびその結果の実生活への有意義性を評価・判断する領域。(2)
- コミュニカート形成のプロセスは、社会化の歴史の中で獲得され、展開された（認識論的／発見的）知識と具体的な行為を統合するような交点である。(3)
- コミュニカート形成のプロセスは、制御された認知プロセスである。予測的な認知スキーマは、ある行為の行動プログラムやその知覚的フィード・バックを遂行出来ると想定される。(4)
- コミュニカート形成のプロセスは、意味の恒常性というヘーアマンの仮説の意味で主体により意図的に構造化されており、結束性を志向している。この仮説は特に文学作品の受容プロセスにおいて有効性をもつ。(5)
- コミュニカート形成のプロセスは、スキーマ産出／変更のプロセスである。その過程でテキスト表層、あるいはテキストの組織化諸原則の特殊な諸要素により、読みのストラテジーが触発され、目標および脈絡の状況に応じて形成されて行く。(6)
- コミュニカート形成のプロセスは、その過程で後方及び前方指向的操作という特徴をもつ。後方指向の認知は、再修正などにより結束構造を生み、前方指向の認知は予備的結束性を形成する。(7) (同：190-192)

Schmidt はこのような特徴を包括するコミュニカート形成プロセスの簡単なモデルを早くから立案している。(Schmidt, 1979: 16) コミュニカート形成プロセスは、テキストをめぐる4行為者、生産者、媒介者、受容者、加工者においてそれぞれ異なるモデルが考えられている。しかもコミュニカート形成プロセスの経験的研究過程の完全な理想モデルも立案している。(Hauptmeier/Schmidt: 164, 165) ただしそれが果たして実行可能な研究方法のモデルであるかは、疑問であり、これからの諸研究に待たれる所である。それはさておいて、テキスト理解に限ってのコミュニカート形成プロセス、とりわけ受容者と加工者のそれをここでは問題にしたい。

これまでもテキスト理解のコミュニカート形成を対象にした研究はあった。文章心理学や Groeben などの経験的研究の人々である。しかしこれらの人々に欠けていた点は、しっかりした経験理論に基づいて行っていないということである。(経験理論については、これまでの私の論文「Metaphertheorie und empirische Theorie」, 「経験的研究の可能性」, 「テキストの受容行為の経験的研究」などで繰り返し論じているので参考にさせていただき、ここでは再論を避ける。) 例えば、彼らは受容者と加工者は、それが同一個人でも、意図や状況の前提条件が異なるので区別されなければならないのに、それを行っていない。もっとも実際のコミュニカート形成の経験的研究においては、4で後述するように、受容者と加工者を区別して扱うことが困難であって、その方法論が問われることになるが、基本的観点から理

論上の区別をしておかなければならない。

2. テキスト受容行為の経験的研究

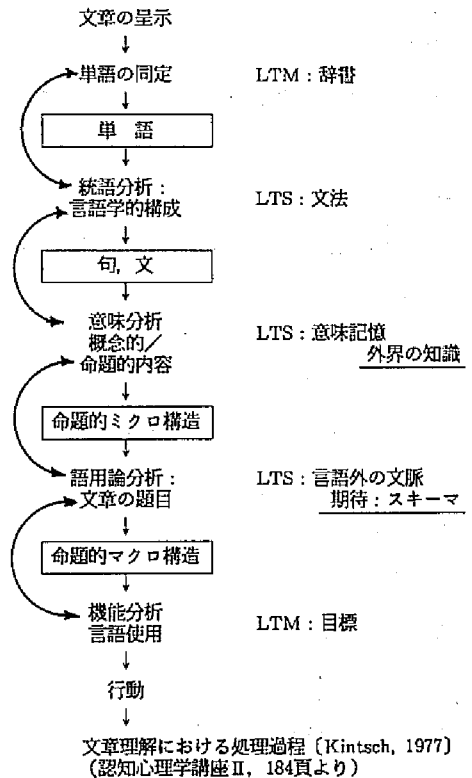
ここで報告するのは、コミュニカート形成プロセスの経験的研究の一例であるが、詳しくは私の論文「テキスト受容行為の経験的研究」を見て戴くことにし、ここではその目的、方法、結果、問題点を簡単に述べることにする。

2. 1. 目的： 認知科学では、テキストの理解過程を図1のように説明している。Kintschに限らず、認知科学の殆どが単語の同定から句、文へ、命題的マイクロ構造からマクロ構造へ認知過程が移行するとしている。しかも Kintsch では、命題的マイクロ構造からマクロ構造への移行過程にスキーマが働くとしている。しかし一方で、認知科学はテキストの置かれた状況判断が先行するという一般的な見解にも達している。「問題空間の定位」である。(認知心理学講座 3 : 162) だが前者と後者の首尾一貫した見解は出されていない。私は経験理論に基づいて、Kintsch とは違う次のようなコミュニカート形成プロセスのテーゼを立てた。番号はプロセスの順序を表す。

- 1 テキストの種類や狭い意味のジャンル別のテキストは、それを受容者が受容する行為（ここではテキストの置かれた状況で受けとること）において、その種類が決定される。その決定に当たっては、その行為に相前後して、または同時に慣習 Konvention (又はフレームと言って良いかも知れぬ) が意識され、働く。
- 2 その後、テキスト提示過程、あるいはテキスト理解過程に行為者の記憶知識としてのテキスト種類別のスキーマが産出され、働く。
- 3 スキーマの働きで、テキストのマクロ構造、マイクロ構造の理解が定まって行く。
- 4 テキストの種類が決定されないままテキストを受容する場合は、途中で、または最後でも、テキストの種類決定と同時に 1, 2, 3, の過程が繰り返される。

これらのテーゼで明らかにしたいのは、経験理論 (Schmidt 1980) で述べられた諸事項である。1.3. で Schmidt が挙げたコミュニカート形成プロセスの特徴とも対応させて見て欲しい。すなわち明らかにしたい事項は以下の事柄である。社会の諸コミュニケーション・システムの中で、受容者は行為時点において、それまでの社会化の歴史で育んだ前提条件でテキストを受容する。(1X3) (以下()は14頁テキスト形成プロセスに付した番号) テーゼ1では受容者に育まれた社会慣習が働いて、テキスト種類の

表4 (注1)



決定が行われる。(3) テキストが曖昧な呈示のされ方をされたり、受容者の恣意性が働くと、必ずしも一義的にテキスト種類が決まる訳ではない。(例えば、入学試験の問題テキストのように、コンテキストなしの場合がそうである。)記録テキストでも、芸術作品として受容するかも知れないし、小説など虚構作品でも、ドキュメントとして受容することもある。いずれにしてもいずれかの慣習が働いてのことであって、受容者の慣習不決定の場合は、テーゼ4となる。(4)(6) 一端テキスト種類が決定されて、芸術作品として受容する場合、受容者は美的(文学)コミュニケーション参加となり、ドキュメントとして受容する場合、ドキュメントとして捉えられたコミュニケーション(例えば、政治)参加となる。美的テキストとして受容するか、その他のテキストとして受容するかで、それに応じた違うフレーム/慣習(Konvention)が働くことになる。テーゼ2では、美的(文学)コミュニケーション参加の場合、テキストが事実性、現実性を含んでいても、美的慣習が優位に働いて多価値的になり、いろんな解釈を許すことになる。逆に、その他のコミュニケーション参加の場合、例えばテキストを広告テキストと受容して、経済コミュニケーションに参加する場合、そのテキストが多義的な詩的文章を用いていても、事実関連慣習が働いて、単価値的になり、それが一義的に何を指すかが分かる。美的コミュニケーションでのテキスト理解には、多価値慣習のスキーマ、例えば詩スキーマ、物語スキーマが形成され、その他のコミュニケーションでは、単価値のスキーマ、例えば広告スキーマが形成される。テキスト理解過程において、部分テキストのスキーマの変更が行われても、最終的には、慣習に従ったスキーマが優位を占める。例えば、受容者にとって広告テキストである場合、詩的部分テキストでは詩スキーマを産出/変更しても、最終的には広告スキーマが産出され、優位を占める。(2)(6)(7) テーゼ3では、その個別のスキーマにより、テキスト理解に影響を及ぼし、テキストの結束構造にも結束性にも影響を及ぼす。(5)(6)(7) これらのテーゼ及びその内容は、関連のある連続したコミュニカート形成プロセスとして捉えなければならない。

2. 2. 調査方法: 調査対象者は金沢大学経済学部2年生2クラスである。図2参照。このA, B2クラスは、個人についてのアンケート調査の結果、ほぼ同じ読書傾向をもち、専門的な文学教育を受けていない、ほぼ同じ前提条件をもつ集

図2

グループ	性別数	専攻	年齢
A コンテキスト情報なし	男37	経済学	19~21
B コンテキスト情報あり	男34 女2	経済学, 工学(5)	19~21

団であることが確認された。社会的、文化的な条件に顕著な差はなく、受容の前提条件は均等と考えて良く、

これらの条件によって調査データが大きく左右されることはないと判断された。

調査テキストは“Lehrbuch: Themen 2”より抜き出したキャンペーン・テキストである。付録参照。Aクラスには、この中の文字の部分だけ提示した。Bクラスには、背景の写真を含むテキスト全体を提示した。その際、両クラスに日本語の訳も付した。

調査の日時は、同時間帯で40分、A, B別々の教室で行った。アンケートは、先ずテキスト全体についてその種類を問ひ、その判断の手掛かりを問うた。次に部分テキストを順に、詩らしいと思うか問うた。部分テキスト1(ゲーテの詩)と7(立て札)については、それぞれ読み取りの区切りを付けても

らい、区切った中で理解、解釈を書
いてもらった。

調査に先立ち、美的（文学）テク
スト受容の場合のスキーマ、キャン
ペーン・テキスト受容の場合のスキ
ーマを予想しておいた。図3参照。ま
た部分テキスト1の可能な限りの結
束構造、結束性を出しておいた。

2. 3. 調査結果： 全体テキストの

判断については、Aクラス（外的コンテキストなし）は詩やその他の文学テキストと見る者が多く75%、
Bクラス（外的コンテキストあり）は、逆にキャンペーンと見るものが多かった80%。その判断基準は、
Aクラスが内容50%と形式ないし印象50%が半々であるのに対して、Bクラスは圧倒的にテーマ、内容
であった89%、しかもAクラスにない「森の統一テーマ」が明確にされていた。このことから予想され
るスキーマの第一段階が既に形成されていることが分かった。またテキスト種類の決定には、外的コン
テキストがいかに左右するかが分かった。言い換えれば、テキスト内の事項そのものには決め手になる
テキスト種類の決定要素はないといってもよい。

部分テキストの種類判断については、Aクラスが、Bクラスと比較して、いずれの部分テキストも詩
らしいと判断する者が多かった。特筆すべきなのは、Aクラスが部分テキスト4（童話）、7（立て札）
を半数以上が詩らしいと判断したことであり、全体テキストを89%がキャンペーン・テキストと判断し
たBクラスが部分テキスト1（ゲーテの詩）66%、3（「モミの木」）72%が詩らしいと判断したこと
である。このことからテキスト内事項が全体テキスト種類決定に影響を及ぼさないことが証明された。
またBクラスは部分テキストにおいてスキーマ変更が行われても、最終的に全体テキストのキャンペ
ーン・スキーマが優位を占めた。このことは次の結束構造、結束性の結果も証明している。

部分テキスト1、7の結束構造については、Aクラスはどちらの部分テキストにも区分の仕方にばら
つきがあり、Bクラスは区分が一定の箇所にとどまった。Bにおいては外的コンテキストによりテク
スト種類が決定され、そのキャンペーン・スキーマ（の第一段階、テーマ）が結束構造にも影響を及ぼし
たとしかいいようがない。スキーマが、単語、句、文の理解に先行することから Kintsch とは違う。

部分テキスト1の結束性については、Aクラスの内、全体テキストを小説、ドラマ、物語と判断した
者及びBクラスの内、小説と判断した者は結束性を見いだせなかった。これらの人々は、部分テキ
ストでのスキーマ変更／更新が行えなかったものと思われる。結束性を見いだした人々については、A、B
クラスとも共通した理解は、前半が静寂、沈黙、憩いの場、後半が鳥や人間の自然への同化である。こ
れは予め考察してあった Isotopie の結束性と重なる。しかしAはテキスト内表現どうり“Gipfeln”,
“Wipfeln”, “Wald” に平均しての理解であるのに対して、Bはそれらを一つにして“Wald”と捉らえ
て結束性を構成している。A、Bクラスの違う点は、Bが「自然が破壊され、森が死につつあって、小

図3

美的テキスト受容の場合。	キャンペーンテキスト受容の場合。
詩受容 ⇒ 多価値慣習	キャンペーン ⇒ 単価値慣習
詩のスキーマ 詩 詩形 (リズム 抒情性) 評価 空間 事柄 テーマ	キャンペーンのスキーマ キャンペーン テーマ 解決 空間 事柄 指示

鳥までも活動の場を失っている」や「昔は森に憩いがあったが、今はなく、人間が自然を守ればやがて回復する」など自然破壊、破壊から回復への結束性を見いだしていることはAに見られないところである。結束構造と結束性の関係を見ると、細かく区切った者ほどテキスト内表現に近い結束性を、区切りの大まかなほど「死」や「自然破壊」の結束性を見いだした。これらのことから、全体テキスト種類の決定が、たとえ部分テキストに対して、スキーマ変更/更新が行われても、結束性のコミュニカート形成に影響を及ぼすことが分かった。以上で Kintsch のたてた理解プロセスは否定されたことになる。

2. 4. 問題性： 外的コンテキストがテキスト種類決定に影響を及ぼすことが分かったが、受容者のもつ前提条件がそれとどのように関わるのか調査出来なかった。又、テキスト種類の決定が結束構造、結束性のコミュニカート形成に影響を及ぼすことが分かって、結束構造の各事項、時制、リズム、そして結束性の各事項、テーマ・レマ構造などの間にどのような影響関係があるのかも調査出来なかった。アンケートが、自由に記述してもらう方式を取らざるを得なかったのも、いた仕方なかったが、その辺は今後の調査の課題となろう。テキスト評価に関するアンケートを用意しなかったのは手抜きである。Aクラスが統一テーマを見いださなかったのに対して、Bクラスは森の統一テーマによるキャンペーンと判断していることから、Aの評価は多価値的、Bは単価値的であると予想されるが、充分ではない。これも今後の課題となる。又、以上の事柄が、受容者の行為と加工者の行為とに区別して扱えなかったのも問題である。その辺の調査は次の Meutsch の報告が明らかにしている。

3. Meutsch の「文学理解の経験的研究」

Meutsch も同じようなテキスト理解のコミュニカート形成プロセスを調査している。彼も一つのテキストを用いるのであるが、私の場合と違って、初めからテキスト種類を文学テキスト、非文学（科学記録）テキストとして分けて情報を与え、アンケートも質問事項に ja, nein で答えさせる、極めて操作的な調査方法も取っている。以下ではその目的、方法、結果を要約し、問題点を指摘しよう。

3. 1. 目的：経験的文学科学理論に沿って、1) 構成主義的認識論から見て文学理解と非文学理解のプロセスに差があるか、それが読者独特の行為として説明されるか、2) 文学理解と非文学理解のプロセスが各々独自の認識過程を取るか、3) 受容行為と加工行為の各状況がこれらの理解プロセスに影響を与えるか、その与え方に違いがあるか、を経験的に確かめることが主な目的である。(Meutsch : 80) この3つの研究目的に対して、更に1) コンテキストが文学性、非文学性の読み取りに影響を及ぼすか、2) 文学テキストとして、あるいは非文学テキストとして理解する場合の目的意識が、文学性、非文学性形成に影響を及ぼすか、3) テキスト理解が行われている状況、つまり受容行為の状況と加工行為の状況は文学性、非文学性の形成に影響を与えるのかが同時に確かめられることになる。(同 : 83) (但し、以下の記述では、状況とはアンケートに応じている状況になることを予め示唆しておきたい。) アンケート作成に当たっては、これらの組み合わせ、ヴァリエーションを用意周到に考慮している。しかし、Meutsch の場合も、受容行為と加工行為を区別はしていても、その相関性を探るものではないし、美的テキストと多価値慣習、実用テキストと単価値慣習の相関関係、およびそれらの慣習が理解プロセス

に及ぼす影響なども理論的に考慮してはいるが、実際の調査対象とはしていない。例えば、美的テキストとしての理解の場合、テキストにない主観性による「代替指示」を、非文学テキストとして理解する場合、「問主観的指示」を読者に想定して、アンケートを作成している。

3. 2. 調査方法： 調査テキストは、バッタの大群が寄せて来る様子を記述した生態記録を用いている。調査対象者は Bielefeld 大学と Münster 大学の文／言語学部の学生で、受容者としての前提条件を揃えている。対象者のグループ分けは、図 4 の

図 4 (Meutsch : 100)

自由記述			コントロール記述	
コンテキスト	目的意識	状況	コンテキスト	目的意識
文学	内容理解	前	文学	内容理解
		後		
	解釈	前		解釈
		後		
非文学	内容理解	前	非文学	内容理解
		後		
	解釈	前		解釈
		後		

のように、文学テキストとして提示される者、科学テキストとして提示される者、更に、各々がテキストに沿って内容を再現 Inhaltswiedergabe (図 4 では内容理解) してもらう者、解釈してもらう者に分けている。更に、その中で、テキストを読んで貰う前に内容記述／解釈についてのアンケートがあることを予め指示する者と読後に指示する者と区別して、計 8 グループである。指示を読前と読後に分けた意味は、(受容行為が認識構成

としてコミュニカート形成プロセスを意味するが、加工行為は受容行為の後のプロセスであるので) 読前の場合、アンケートの答えが受容行為であるが、読後の場合、文学的、非文学的読みに関係無くなり、受容行為ではなく、加工行為となるというのである。これらの実験を行った後で、アンケート質問文に ja, nein で答えるコントロールされた再認識 Wiedererkennung の調査が行われている。その際、読前、読後の指示はなくなるから、4 グループとなり、他にコントロールの調査のみ受ける(この場合、再構成 Rekonstruktion 調査となる) グループ 4 でここでも合計 8 グループとなる。(従って、全体で 12 グループ (1 グループ 20~25 人) となる。)

いずれも調査に際しては、尤もらしい説明を付けてテキスト種類を限定している。テキストを読後回収してから、アンケートを取っているため、被験者はアンケートに応じる時点で、テキストに戻ることが出来ない。従って、私見であるが、コミュニカート形成プロセスというより、いずれも推敲された (elaboriert) コミュニカート形成が調査されたことになるのではないだろうか。アンケートの質問文は同じ事項を問う場合でも、当然ながら文学、非文学、さらに内容理解、解釈のグループに応じた表現を用いている。

3. 3. 調査結果： 複雑なデータ計算処理は省くことにして、結果を報告する。

文学理解とそのための 3 要因 (コンテキスト, 目的意識, 状況) との関係についていうと、コンテキストと目的意識要因は主観的な (推敲) 文学理解に特に影響を与える。その両要因の影響はほぼ同じ程度である。目的意識は文学理解の中で優位を占め、非文学的部分も文学理解にしてしまう。それに対して、状況の要因は単独では文学理解には、内容理解 (Inhaltswiedergabe) にも解釈にも全く影響を及ぼさない。が僅かではあるがコンテキストと共に影響を与える。回想の状況の解釈への影響は、しかし

文学よりも非文学で強く、非推敲理解よりも推敲理解で強かった。

いずれの結果もコンテキストと目的が要因として影響力があるのに、状況の要因はそれ自体としては影響力がないことが分かった。又いずれの結果も、テキストを文学テキストとして理解し、(理解プロセスを経た後) 評価することにもコンテキストと主観的推敲の目的が影響することが分かった。また文学理解を主導する慣習的状況(文学コンテキスト)は主観的推敲(解釈)の目的を内包していることも分かった。文学理解を遂行させる習慣的要因(作者、ジャンルなどテキスト種類の記述)、つまり文学理解コンテキストは理解行為の目的として推敲的活動を呼び起こすのである。その際コンテキストと目的的要因が理解状況のメルクマールとして働くからであることを強調しておかなければならない。それはしかし受容行為の状況、加工行為の状況に区別なく働き、文学理解行為には受容、加工を区別するメルクマールとして働かない。また全体的に目的的要因について確認したことから次のように言える。1) 文学理解は、理解者のコンテキスト、目的に沿った構成として記述可能である。読者は文学テキストを読み、理解するだけでなく、どんなテキストでも文学として読み、理解することが出来るのである。2) 文学理解は理論的に受容、加工と区別出来ても、文学理解プロセスとしては受容状況、加工状況のメルクマールでは受容プロセス、加工プロセスとして確認は出来ない。3) 文学テキスト理解は一般的三つの認識構成、つまり三つの推敲タイプに分類出来る。代替指示をもつ内容推敲、文学特有の記号をもつメタテキストレベルの推敲、多価値的認識の推敲である。

4. 結びとして(3. 4. の問題性も含めて)

Meutschの厳密な予備考察とそれに沿った調査、計算は驚くべきエネルギーである。コンテキスト、目的、状況の3要因がテキスト理解に及ぼす影響力の度合いはこの経験的調査研究で明らかにされた。しかし状況というのは、初めにことわったように、アンケート調査の状況である。通常の「状況」はこの調査で言うコンテキスト、目的要因も含むものとして使用する。従って、私の報告の「テキストのおかれた状況」の及ぼす影響と区別して理解して欲しい。Meutschの報告でコンテキスト、目的と共に働く状況を考えれば、私の報告と矛盾するものではない。Meutschの報告には、実際のアンケート文にどんな反応があったのか、実験グループでの自由記述がどんな記述例があったのか一切報告されていない。その必要性がないとの判断からであろうが、知りたいところである。Meutschは、受容と加工について、「理解過程の観察結果、この区分に疑問を呈した。Schmidtの受容と加工の理論的に成功しているこの考え方に修正が必要である。文学理解プロセスではプロセス全体のどの時点でも非文学的Vorläufer, Parallelläufer, そのようなものは生じない。文学理解は、完全に独特な認識プロセスである。」(Meutsch: 161)と明言しているが、これはこの経験的調査研究では直接アプローチ出来なかったということであろう。別の箇所では、「受容と加工プロセスを記述的に二つの対象として捉らえる方法論を見付けねばならない。例えば、テキストを一度受容し、一週間後この同じテキストについて報告してみるなどの調査である。」(162)ともいっている。いずれにしても、操作的な調査でなく、もっと自然のテキスト理解プロセス研究の方法が展開されなければならないと考える。それにはMeutschも言っ

ているように、認知心理学その他との共同研究が必要であろう。

ここに出された結果は、我々の思考で推量出来る範囲を越えるものではなく、極めて常識的なものかもしれない。が一つ一つ確実に実証し、その積み重ねを可能にするのが学問である。それにしても、私の報告も、Meutschの報告も、同一のテキストが異なるテキスト種類の決定/設定によって、これほどテキスト理解プロセスが違ってくるのは驚くべき事であって、文法学者も無視出来ないことであろう。最後に、この研究は Siegen 大学での共同研究に負うところが多く、これには A.v. Humboldt-Stiftung の援助があったことを付記しておきたい。

注

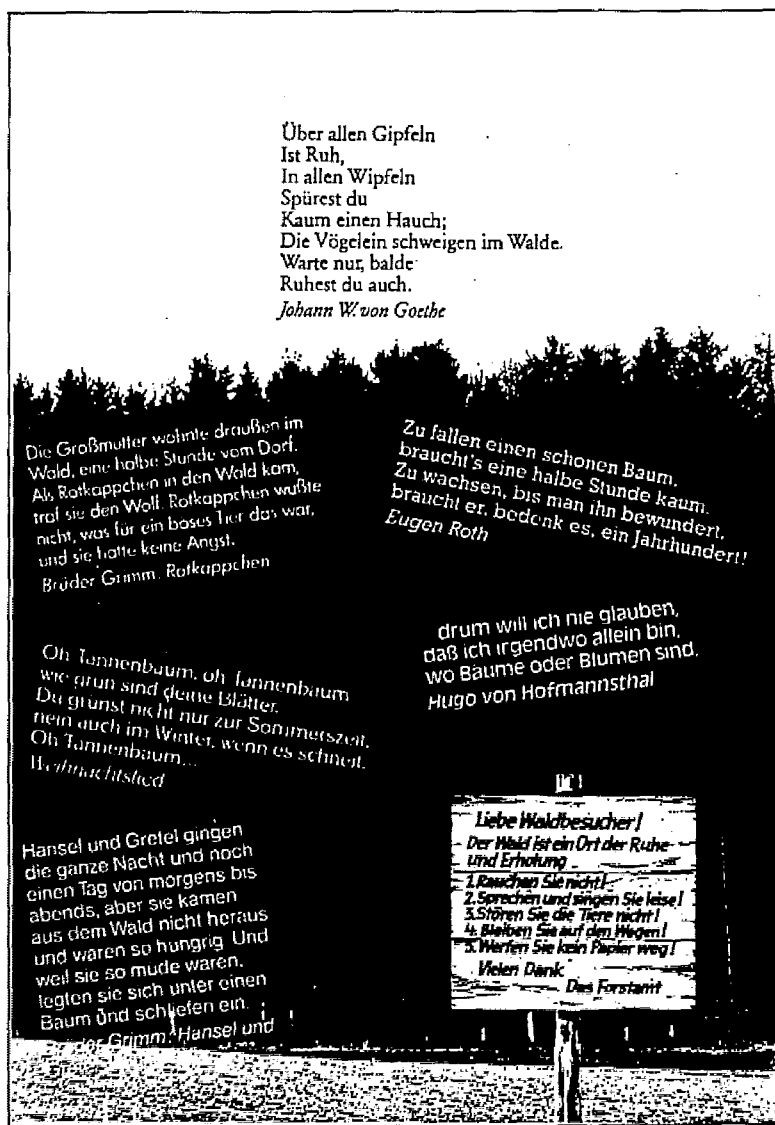
1. autopoiesis はギリシャ語の autos 「自己」、poiesis 「生産」から来ている。
2. () の出典で片仮名を使ってあるのは、翻訳文献を示す。
3. 認知科学では、人間の知識としての操作過程をスクリプト、それに対応する機械の処理をフレームと言っているが、私は Winograd のいう意味でフレームを用いる。
4. 認知心理学講座 2 に載っている図は、ボトム・アップ、トップ・ダウンを示す線が入っていないが Kintsch の原文では入っているので訂正して載せてある。

文 献

- van Dijk, T.A. 1980 : Textwissenschaft. dtv wissenschaft.
- Hauptmeier, H./Schmidt, S.J. 1985 : Einführung in die empirische Literaturwissenschaft. F. Vieweg, Braunschweig/Wiesbaden.
- Kintsch, W. 1977 : "On Comprehending Stories." In : Just/Carpenter (Hrsg.) : *Cognitive Processes in Comprehension*. Hillsdale, N.J. Erlbaum.
- Matrana, H.R. 1982 : Erkennen : Die Organisation und Verkörperung von Wirklichkeit. F. Vieweg Braunschweig/Wiesbaden.
- Meutsch, D. 1987 : Literatur verstehen. Eine empirische Studie. F. Vieweg, Braunschweig / Wiesbaden.
- Schank, R.C. 大村/大塚訳 : 「言語と記憶」 In : ノーマン編 : 『認知科学の展望』産業図書
- Schmidt, S.J. 1979 : Empirie in Literatur- und Kunstwissenschaft. Wilhelm Fink Vlg.
- Schmidt, S.J. 1980 : Grundriß der empirischen Literaturwissenschaft. Bd 1 F. Vieweg Braunschweig /Wiesbaden.
- Schmidt, S.J. 1986 : Texte verstehen—Texte interpretation. (Manuskript) : シェミット「テキスト理解—テキスト解釈」杉谷真佐子訳1987. 関西大学『独逸文学』31号
- Schmidt, S.J. 1987 : Der Diskurs des radikalen Konstruktivismus. Stw 636.
- Thorndyk, P.W. 1977 : Cognitive structures in comprehension and memory of narrativ discourse. In : *Cognitive Psychology*, 9.
- Winograd, T.A. 1975 : Frame representation and the declarative procedural controversy. In Bobrow, & Collins eds., *Representation and understanding*. New York : Academic Press.

— 白井英俊訳：「言語を理解するとはどういことか」 In：ノーマン編：『認知科学の展望』 産業図書
 今田高俊 1986：『自己組織性——社会理論の復活』 創文社
 『認知心理学講座』 1, 2, 3, 4 東京大学出版会
 大滝敏夫 1986：「テキスト受容行為の経験的研究」 金沢大学文学部論集文学科編 6号

付録



疑問文、質問、返答

植木 迪子

0. 日本語には疑問文と質問という語源を異にする二通りの表現がある。疑問文は文の種類を表しており、平叙文、命令文、感嘆文に対応する統語論の概念であるのに対して、質問とは行為を表し、挨拶、助言、要請、命令などに対応する。疑問文の中心となる用途は質問をすることであるが、それ以外にも疑問文を用いて様々な行為が可能である。字義どうりの意味とは異なる意図で用いられる発話は、間接発話行為と呼ばれる。

- (1) Bist du noch auf?
- (2) Kannst du das Fenster schließen?
- (3) Was hat Vater gesagt?
- (4) Kannst du das nicht lassen?
- (5) Warum hast du das getan? (Franck, 1975: 229)
- (6) Siehst du was für dunkle Wolken kommen? (Franck, 1975: 230)

例えば(1)は、遅くまで起きている子供にたいする驚きや非難の表明、あるいは、まだ起きているのなら一寸話がしたいという希望の表現としても機能する。(2)は相手に窓を閉める事が出来るかどうかを問うというよりも、むしろ窓を閉めて欲しいという要請である。(3)は父親が言ったことを尋ねる以外にも、父親の言いつけに従おうとしない子供にたいする咎めだてともみなせるし、(4)(5)に至っては、たんなる質問よりはむしろ難詰の調子が強いといえよう。また(6)は、天気が崩れるから外で遊ばないように子供を説得する場合などに使われよう。

このように、疑問文という文の種類と質問という言語行為の間には必ずしも一対一の対応関係があるわけではない。従って、語用論の立場から言語現象を考える際には、それぞれのレベルを分ける必要が生じる。ここでは、Wunderlich (1976a) や Frier (1981) にもとづいて、疑問文、質問行為、質問状況を次のように区別し疑問文と質問行為を中心に考察をすすめる。

疑問文は、質問行為を遂行するための特定の言語形式である。

質問行為は、相手に対して、知識に関するある特定の問題を解決してくれるようにと依頼する行為であって、多くの場合言語を用いてなされる。

質問状況は、特定の質問に対応する、発話の言語外の枠となる条件である。

1. 疑問文を、質問行為を遂行するための言語形式と規定すると、それは主に統語論および意味論の領域に属し、その種類として次のようなものが考えられる。

- (7) 決定疑問 Hat Hans das Buch gekauft?
 (8) 選択疑問 Gehst du ins Kino oder ins Konzert?
 (9) 補足疑問 Was macht Anne heute?
 (10) 反応疑問 Du kannst Auto fahren?
 (11) 付加疑問 Du gehst doch ins Kino, oder nicht?

ドイツ語の疑問文においてこれらの形式を特徴づけるのは、疑問詞、動詞の位置、音調などである。(7)と(8)はともに定動詞が文頭にあり(7)は上昇調をしめし、(8)は oder で結ばれた二つの選択肢を有している。ただし、(8)には音調によって二通りの読みが可能である。

(8)' Gehst du ins Kino oder ins Konzert ↑ (↑は上昇調)

(Ist es der Fall, daß du ins Kino oder Konzert gehst)

(8)'' Gehst du ins Kino ↑ oder ins Konzert ↓ (↓は下降調)

(Ist es der Fall, daß du ins Kino gehst, oder ist es der Fall, daß du ins Konzert gehst)

(8)'のパターンでは、「映画か音楽会」へ行くのか行かないのかを問うことになって選択疑問ではなく決定疑問となってしまうが、(8)''の音調であれば「映画か」「音楽会か」の二者択一を選択させる疑問として機能することとなる。このことから逆に、決定疑問の基本形式は(7)''のような選択疑問であると考えて、決定疑問と選択疑問に共通の意味・論理構造を見ることも可能となる。

(7)'' Hat Hans das Buch gekauft oder nicht?

(9)の形式上の特徴は文頭に疑問詞をとる点であり、一般にはそれ以外に上昇調などの疑問標識を必要としない場合が多い。それに対して(10)は上昇調が不可欠である。相手の発話をうけて鸚鵡返しに問うこの疑問は、「焦点となる成分(語)の強勢が置かれた音節に抑音があり、残りの音節は文末まで全て高く発音される」(Wunderlich, 1986: 44)という独特の音調をもっており、焦点となる成分に応じて多様な形をとる¹⁾。

(11)は、形が(7)''に似ていて決定疑問の一種とも考えられるが、(7)''は全体が疑問文であるのに対して(11)は[平叙文+tag]という形をとる。また、(7)''にはJa/Neinで答えるのに対して、(11)にはDoch/Neinで答える点が異なっている。“tag”には肯定(oder)と否定(oder nicht)の二種があり、肯定文の後には(11)のように否定が、否定文の後には(12)のように肯定がきて、ともに上昇調をとる。また平叙文はdochのような心態詞を用いて話し手の期待を表明する場合が多い。

(12) Du gehst doch nicht ins Kino, oder?

2. ところで、1. であげた分類は疑問文の形式上の特徴を基準としたものだが、その名称が疑問文の形態にもとづいているのは(11)のみであって、(7)、(8)、(9)は答えの性質を表し、(10)は疑問文の機能を表現してむしろ語用論に属する視点を提示している。問いと答えを対をなすものとして捉える考え方にもとづいて疑問文の意味・論理構造を規定しようという試みが近年盛んとなってきている²⁾。そこでは、疑問文はその答えとして可能な選択肢の集合を提示し、応答行為はその選択肢のうちから一つを選び出す

ものであるという図式が示されている。決定疑問文と選択疑問文は、先に述べたような意味・論理構造の類似にもとづき二つの選択肢のうち一つを選びだし、補足疑問文は可能な答えの集合から一つを選ぶこととなる。

- | | | | |
|------------|------------------------|-------|--|
| (13) 決定疑問文 | Kommt Peter? | 選択肢 : | $\left. \begin{array}{l} \text{Peter kommt} \\ \text{Peter kommt nicht} \end{array} \right\}$ |
| (14) 選択疑問 | Kommt Peter oder Hans? | 選択肢 : | $\left. \begin{array}{l} \text{Peter kommt} \\ \text{Hans kommt} \end{array} \right\}$ |
| (15) 補足疑問 | Wer kommt? | 選択肢 : | $\left. \begin{array}{l} \text{Anne kommt} \\ \text{Peter kommt} \\ \dots \\ \text{Hans kommt} \end{array} \right\}$ |

質問行為を遂行する人物と応答行為を行う人物は通常は別人であるが、このように質問と応答が対をなすと考えると、この一對の発話は Egli の言うところの「基本的対話」(Egli, 1974 : 103) となる。質問する人は、質問の対象となる事柄についてある程度の知識をもっており、この知識にもとづいて推論をくだし、疑問文の形式を決める。(14) のような選択疑問を発する人は、Peter か Hans のどちらか一方が来ると思っているし、(15) の質問を行う人は、誰かが来ると思っている。Wer kommt, Peter oder Hans? という形はもちろん可能だが、これは、補足疑問と選択疑問が複合された形と理解すべきだろう。これに対して決定疑問の場合に質問者は、Peter が来ることについての可能性は彼が来るか来ないかのどちらかであることを知っていることになり、まえの二つの場合とは前提としていることの質が若干異なる。選択疑問と補足疑問の知識は具体的な行動の次元に属するのに対して、決定疑問の知識は論理的判断の次元に属する。いずれの場合にも知識の内容には Peter/Hans/.../Anne を特定できるということが含まれているし、質問を向ける相手はその問いに答えることができるはずだという判断を可能にする、相手の知識についての推測もここに属している。

反応疑問と付加疑問もまた知識の補綴行為だが、(10) の話し手はそれまで相手が車を運転できることを知らずにいて、この質問に先行する発話から相手が運転できることを知って驚き、新しく獲得した知識が真であることを確認しようとしている。つまり、反応疑問に先だつ発話の内容が話し手の知識と矛盾しているわけである。反応疑問はこのように先行する発話が必要で、質問という発話行為の特徴の一つに数えられている「先行性」⁹⁾を持たない点が特殊である。付加疑問では話し手の知識が明示的に表現され、その点では選択疑問に似ているが、選択疑問では選択肢が等価、つまり中立であるのに対して、付加疑問の平叙文は話し手の期待を表しているところが異なっている。反応疑問と付加疑問に共通するのは、知識の獲得よりもむしろ確認であり、反応疑問では既知の事柄が修正されなければならないのかどうかを問い、付加疑問では話し手の理解が正しいのかどうか問われる。

さて、質問と応答という二つの行為を一對のものと思なす考え方に従えば、当然のこととして応答する側の知識や推測も問題にされなければならない。質問を受けた聞き手は質問者が問いの答えを知らな

いが聞き手は答えを知っていると考えているだろうと推測する。質問者が答えを知っているが質問することは、口頭試問のような相手の知識を試す場合を除き、サールの誠実さの規則 (Searle, 1969 : 66) やグライスの会話のルールの中の関連性の公準 (Grice, 1975 : 451) に違反する。

このように、話し手と聞き手が相互に相手の知識、推測、意図を推し量りながら会話が進行するわけだが、その際に疑問文の形に加えて焦点の有無も答えに影響を与える。

(16) Geht Monika diesen Herbst auf die Schule?

(17) (a) Ja.

(b) Nein.

(c) Nein, Brigitte.

(d) Nein, erst nächstes Jahr.

決定疑問の答えは文頭に Ja か Nein をとり、このような肯定か否定の副詞だけで十分な場合も多い。(16)は「モニカがこの秋学校にあがるかどうか」を問うていると受けとって、その全体を肯定あるいは否定するならば、その答えは単なる Ja か Nein で十分である。グライスの量のカテゴリーの 2) に従えば、それで十分なのであればそれ以上のものを付け加える必要はないはずである。ところが(16)の答えとして(17(b))が不相当で(17(c)(d))のほうが望ましい場合がある。これはどのような理由によるのだろうか。「モニカがこの秋学校にあがる」という命題には、モニカとこの秋という二つの焦点があり、質問(16)はこの焦点のそれぞれにたいする問いとしても機能する。その焦点をより明確にするためには次のような質問を選ぶことができる。

(18) (a) Ist es Monika, die diesen Herbst auf die Schule geht?

(b) Wer geht diesen Herbst auf die Schule?

(19) (a) Ist es diesen Herbst, daß Monika auf die Schule geht?

(b) Wann geht Monika auf die Schule?

(18(a))と(19(a))は分裂文の形をもった疑問文であって、[連辞+es+焦点+関係代名詞+前提]という型をとる。ここでは話し手の抱いている前提が明確に表現されており、例えば、誰かがこの秋学校にあがることはすでに明らかであって、知りたいのはただそれが誰なのかだけであることになる。モニカが焦点となっている決定疑問(18)もまた(18(a))と同じ前提を持つ。

(20) Geht Monika diesen Herbst auf die Schule?

これに対して、(16)がどこにも焦点をおかずに質問として用いられたときには、(16)に前提が無く、質問者はモニカがこの秋に学校にあがること全体について、それが正しいかどうかを尋ねていることとなる。つまり、焦点の無い決定疑問は前提を持たないのである。補足疑問(18(b)), (19(b))の前提はそれぞれ(21)および(22)であって、対応する分裂疑問や焦点をもった決定疑問とある重要な点を除いて同じである。

(21) Jemand geht diesen Herbst auf die Schule.

(22) Monika geht irgendwann (bald) auf die Schule.

焦点をもった決定疑問と補足疑問の前提に関する基本的な違いは、前提が誰の知識であるかという点

にある。決定疑問の前提は話し手と聞き手が共有する知識に属しているが、補足疑問の前提は質問者だけが抱いているものである。

このように焦点をもった決定疑問に対しては、肯定の場合は Ja だけでも十分であるが、否定の場合には Nein に続けて焦点となっている項目についての情報を付け加えなければならないことになる。

つぎに、決定疑問でありながら肯定の副詞だけでは答えとして不適當である事例をあげる。

㉓) Weißt du, wann Peter zurückkommt?

㉔) (a) Nein.

(b) *Ja.

(c) Ja, erst morgen Abend.

㉓)のように wissen をとる決定疑問は、否定される場合には Nein のみで答えとして妥当だが、肯定するためには Ja に加えて埋め込まれた文の答えとなる情報をも与えなければならない。また、wissen をとる母型文には㉓)のような補足疑問だけでなく㉔)のように決定疑問をも埋め込むことができる。この場合にも答えに関しては否定は単独でもよいが肯定は Ja に続けて情報を提供しなければならない。

㉕) Weißt du, ob heute die Post auf hat?

㉖) (a) Nein.

(b) *Ja.

(c) Ja, aber nur bis zwölf.

3. 1. および 2. では疑問文と返答の関係を主として形式にもとづいて検討したが、質問という行為は必ずしも疑問文に依存しているわけではなく、言明文で質問することも疑問文で返答することも可能である。

㉗) A: Ich weiß nicht mehr, wann Kolumbus Amerika entdeckt hat.

B: War das nicht 1492?

㉘) A: Ich habe meine Brille schon wieder verlegt.

B: Warst du nicht vorhin im Bad?

㉙) A: Hat Fritz die Fensterscheibe eingeworfen?

B₁: Wie bitte?

B₂: Die Scheibe ist doch gar nicht kaputt.

B₃: Welche Scheibe?

B₄: Fritz hat die Fensterscheibe eingeworfen?

B₅: —.

(Böttner et al., 1974: 21f)

A, B はそれぞれ別な人物によって連続して発話された談話で、A は質問という発話内行為を遂行し、B はその返答である。情報を得るために遂行する発話行為が質問であるならば、求められている情報を提供するのが妥当な返答となる。㉗) A-㉙) A に対する妥当な返答は㉗) B と㉘) B のみだが、それ以外の返

答もなんらかの形で先行する質問に対応している。以下ではこのように多様な反答について見ていくこととする。

⑦Bと⑧Bは共に決定疑問文で否定のnichtを伴っており、⑦'と⑧'と同様に発話者の推測とその確認という機能を荷っている。

⑦' Das war doch 1492, oder nicht?

⑧' Du warst doch vorhin im Bad, oder nicht?

⑦Aは間接疑問文であり、⑧Aは言明文だが共に知識の欠落を埋めてくれるようにという依頼と受けとることができ、それに対応する⑦B、⑧Bは疑問文の形をもちながら話者の推測を表現することによって情報を提供し返答としての役割を果している。

⑦'と⑧'を比較すると、⑧'は先行、後続ともに可能だが⑦'は後続しか許されない。これは⑦Aのwann以下の部分が⑦'では略されているためであり、⑧Bも同様に省略によって先行性を失っている。

⑦" Kolumbus hat doch 1492 Amerika entdeckt, oder nicht?

⑨' B: Welche Scheibe hat Fritz eingeworfen?

⑦'と⑨Bの省略されている部分を捕うと、それぞれ⑦"、⑨' Bとなり先行性を回復するが、⑦"は後続するとくどくなり、後続の場合には省略形の方が一般的である。また⑨' BはFritzが窓ガラスを壊したことを前提としているのに対して、⑨Bはその事実を疑う場合にも使用できる。このように、省略文と省略を含まない文の前提は必ずしも一致しない。

⑧Bは後続するにもかかわらず省略部分をもたないが、これは⑧Aと⑧Bの間の結束性の度合による。後続する発話で省略が可能な場合に比べると省略できない場合には直前の発話との関連が弱く、⑧A・Bを連続する発話として理解するためにはいくつかの段階が必要である。例えば：

- 1) Aは眼鏡をどこに置いたか憶えておらずその所在を知りたいと思っているが、Bがその所在を知っているかどうかは確信がない。しかし、もしBが眼鏡のありかを知っていれば教えてくれるものと思っている。AはBが発話⑧Aを自分に向けられたものと理解し、かつ承認すると思っている。
- 2) Bは発話⑧Aを自分に向けられたものにとらえ、その内容を理解し承認している。Bは眼鏡のありかを知らないが、Aのここ1時間程の行動を承知している。
- 3) AB双方にとって浴室は眼鏡をはずすことの多い場所として理解されている。
- 4) 1), 2), 3)にもとづきBの発話⑧Bは、BがAに眼鏡があるかもしれない場所についてのBの推測を伝える試みとして理解される。

⑦B、⑧B、⑨B_{2,3}がいずれも先行する発話に依存しているのに対して、⑨B_{1,4}はともに後続性しかもたないが、先行する発話に依存してはいない。つまり、Wie bitte?という質問は、それに先だつ発話を十分に理解しなかったことを相手に知らせて繰返し同じ趣旨の発話を行なうようにうながす目的で用いられ、先行する発話の内容とは無関係である。また返答としての沈黙も先行する発話に依存してはいない。沈黙は後続してはじめて沈黙として知覚される。相手に語りかける発話に対しては当然なんらかの反応があるものと期待されるし、その反応が言語を用いたものである場合が多い。反応には言語を

用いないものもあるが、29B₅を言語以外の手段による反応としてではなく、いかなる他の反応をも示さないという意味での沈黙と受けとると、このような沈黙は語りかける発話に続いた場合にのみ意識され、語りかけた側はそのような無反応にある意味を付与することとなる。ところで、質問の受容として考えられる反応にはa) 知覚、b) 理解、c) 承認の三段階がある。妥当な返答は質問が知覚され、理解され、承認されてはじめて可能となるが、返答における沈黙は質問が知覚されていない場合、知覚されたが理解されない場合、知覚し理解したが承認できない場合のいずれにも用いることができる点に特徴がある。29B₂は、質問を知覚し理解したがその内容を承認できない場合の返答であり、29B_{1,3,4}は、質問が知覚されたが理解が不十分で確認を要する時に用いられる。29B₁が質問全体の内容の問い返しであるのに対して、29B₃は壊れた窓ガラスを特定するのに用いられ、B₄は焦点の有無とその焦点がFritz, Fensterscheibe, eingeworfenのいずれにあるかによって内容の異なる問い返しとなる。このように先におこった知覚、理解、承認という質問の受容

表1

における区分は、29B₁、B₃、B₄を分類するのには不十分だが、妥当な返答、質問を承認しない返答、理解を深めるための返答を区別する基準としては有効である。知覚、理解、承認の別によって27Bから29B₅までの返答を整理したものを表1に示した。

	知覚	理解	承認
27B	○	○	○
28B	○	○	○
29B ₁	○	△	-
B ₂	○	○	×
B ₃	○	△	-
B ₄	○	△	-
B ₅	{ × ○ ○	{ - × ○	{ - - -

○：成立
△：不十分
×：不成立
-：φ

4. ここで見てきた質問と返答は、多かれ少なかれ状況から切り離されたものであり、いうなれば談話の不完全な形とみなすことができる。言語による表出はコミュニケーション状況の一部にすぎず、言語表現以外にも表情、身ぶり、声の調子、話者と聴者の距離などによって伝わる情報は少なくない。また状況を形成する要素として時間、空間、伝達手段、話者・聴者の特性、知識、相手についての憶測など考慮すべき点は多様である。

ところで、質問状況についての考察が意味あるものとなるためには、行為の規則性を解明する必要がある。コミュニケーションは記号を用いた行為であるが、そもそもひとが他者と関わることを可能にするのは言語であり、言語による省察を経てはじめて自他の意識が定着する。他者に働きかけて自己の欲求を充足させるためには、予測される反応に規定される形で自らのことばを選ぶこととなる。この仕組みをある程度まで形のうえでも映し出している点で疑問文と質問—返答は興味ある対象である。本論では状況の問題にあまり立ち入ることができなかつたが、質問—返答の特徴を考察する過程で状況の本質的な部分をなす話者の知識や憶測と言語形式の関わりを多少なりとも示すことができたならば幸いである。

注

- 1) 反応疑問のイントネーションおよび文型については Wunderlich (1986) に詳しい。
- 2) 例えば Egli (1974), Hamblin (1973), Hausser (1978) など。
- 3) Wunderlich (1976a) などで指摘されている特徴で、呼びかけ—応答や質問—返答、あいさつのように対をなす一連の発話行為において先行するものを initial と称する。
- 4) ㊦ B は A の発話内容に対する疑いの表明とも、驚きの表現ともとれる。いずれにしても ㊦ A が信じられないためになされる問い返しであり「〇△—」「〇〇△」「〇△×」「〇〇×」などの場合が考えられる。㊦ であげた返答の例は考えられる返答のごく一部であり、従って表 1 の分類も一つの方向を示したにすぎない。Böttner et al. は ㊦ A に対して考えられる返答として 72 通りの可能性をあげている。

文 献 表

- Bäuerle, Rainer 1979a : *Temporale Deixis, temporale Frage*. Tübingen.
- Bäuerle, Rainer 1979b : Questions and Answers. In Bäuerle/Egli/Stechow eds. 1979.
- Bäuerle/Egli/Stebhow eds. 1979 : *Semantics from Different Point of View*. Berlin.
- Böttner, Michael et al. 1974 : *Kommunikationswissenschaftliche Untersuchung von Frage-Antwort-Interaktionen*. Ms. IKP Bonn.
- Cole/Morgan eds. 1975 : *Speech Acts. Syntax and Semantics 3*.
- Egli, Urs 1974 : *Ansätze zur Integration der Semantik in die Grammatik*. Kronberg.
- Egli, Urs 1976 : *Zur Semantik des Dialogs*. Papiere des SFB 99, Konstanz.
- Ehrich, V/Finke, P. eds. 1975 : *Beiträge zur Grammatik und Pragmatik*. Königstein.
- Franck, Dorothea 1975 : Zur Analyse indirekter Sprechakte. In : Ehrich/Finke eds. 1975.
- Frier, Wolfgang 1981a : Zur linguistischen Beschreibung von Frage-Antwort-Zusammenhängen. In : Frier ed. 1981b.
- Frier, Wolfgang ed. 1981b : *Pragmatik, Theorie und Praxis*. Amsterdam.
- Grice, H.P. 1975 : Logic and Conversation. In : Cole/Morgan eds. 1975.
- Hamblin, C.L. 1973 : Questions in Montague English. In : *Foundations of language* 10.
- Hausser, Roland 1978 : Surface compositionality and the semantics of mood. In : Kiefer/Searle/Bierwisch eds. 1978.
- Karttunen, Lauri 1977 : Syntax and semantics of questions. In : *Linguistics and Philosophy* 1.
- Kiefer, Ferenc 1978 : Yes-No Questions as Wh-questions. In : Kiefer/Searle/Bierwisch eds. 1978.
- Kiefer/Searle/Bierwisch eds. 1978 : *Speech act theory and Pragmatics*. Dordrecht.
- Meibauer, Jörg 1986 : *Rhetorische Fragen*. Tübingen.
- Searle, J. 1969 : *Speech Acts. An Essay in the Philosophy of Language*. Cambridge.
- Searle, J. 1975 : Indirect Speech Acts. In : Cole/Morgan eds. 1975.
- Wunderlich, Dieter 1976a : Fragesätze und Fragen. In : Wunderlich 1976b.
- Wunderlich, Dieter 1976b : *Studien zur Sprechakttheorie*. Frankfurt a.M.
- Wunderlich, Dieter 1986 : Echofragen. In : *Studium Linguistik* 20.

テキストにおけるアド・ホック構成の理解

植 田 康 成

本論文は、次の各節から成っている。

- 0 本論文の狙い
- 1 造語一般
 1. 1 造語の理由
 1. 2 造語の方法
 1. 3 名詞複合語の統語的及び意味的規定関係
- 2 アド・ホック構成一般
- 3 前照縮約名詞複合語
 3. 1 ラング／パロール複合語（ゼッペネン）
 3. 2 例による考察（言語外コンテキストとの関わり）
 3. 3 前照縮約名詞複合語（言語的コンテキストとの関わり）
- 4 まとめ
- 5 注釈
- 6 参考文献一覧表

0 本論文の狙い

本論文は、内容構成からも明らかなように、まず造語一般について考察する。次にアド・ホック構成一般の規則について検討する。その中でも名詞複合語について、再掲 Wiederaufnahme 現象の 1 つとして、前述された事柄を圧縮して名詞複合語とする場合（前照縮約名詞複合語 *anaphorisch komplizierte Nominalkomposita*）を考察の中心におき、テキストにおけるその理解のプロセスと機能を解明する。

結論的には、複合語理解におけるコンテキスト *Kontext* の役割の重要性と、事柄そのものに関する知識 *Sachwissen* の重要性を確認することになる。

1 造語一般

1. 1 造語の理由

新語がつくりだされる主な理由としては、2つが考えられる。

第1には、新しい事物を指す語がないときである。文明の進展、新しい社会体制の成立とその整備によって、あるいは文学的創造として、新語が増大していく¹⁾。

もう1つの主な理由は、概括的に言えば、文体的なものである。すなわち、既存の語のバリエーションとして、新語が作りだされる。

後者は、さらに詳しくみていくと、『小百科事典ドイツ語』(Deutsche Sprache, 1983: 243-244)では5つの理由をあげているが、実際はそれだけにとどまらず、もっと多様な理由が観察されている(これについては、さらに第2節で詳述する)。

1. 2 造語の方法

造語 Wortbildung 一般の方法としては、リュール (Lühr 1987: 149) によると、大きくいって4つの方向が考えられる。

第1の可能性は、まず表現を拡大すること Ausdruckserweiterung である。これは諸要素の組合せによるものであり、いわゆる複合語である。

第2の方向としては、表現の縮約によるもの Ausdruckskürzung、つまり省略とか短縮によるものがある(例えば、Geldtransportauto→Geldauto, Katalysatorauto→Kat-auto といったものや、UNO がこのタイプ)。

第3の方向は、明示的でない派生 implizite Ableitung である(例えば、besuchen→Besuch という派生)。

第4番目には、文法範疇を転換すること grammatische Umsetzung in die andere Wortart がある。これは、とりわけ、動詞の名詞化といったものが代表となるだろうが、それに限らない。著名な例としては、E・ブロッホの「未だ存在しないものの存在論について Zur Ontologie des Noch-Nicht-Seins」という表題のなかでの das Noch-Nicht-Sein がある。もっと典型的には、ハイデッガーの『存在と時間 Sein und Zeit』の中では、世界内存在 Das in-der-Welt-sein を始めとして、この類の造語がふんだんに見られる。

第1番目の表現の拡大は、さらに2つの方向に分かれる。そのひとつは、他の語との組合せによるものであり、もうひとつは、造語のための要素との組合せ、つまり明示的な派生や接辞との結合による造語である。

他の語との組合せが、いわゆる複合語 Komposita となるが、これも大きくいって、4つのタイプがある。規定的な複合語、所有複合語(8気筒エンジン車 Achtzylinder や赤頭巾ちゃん Rotkäppchen)、前置詞支配による複合語(午前 Vormittag、間氷期 Zwischeneiszeit)、繫辞的複合語(作詞作曲家 Dichterkomponist、パンティーストッキング Strumpfhose)の4つである。いわゆる複合名詞の大部分を占めるのが規定的な名詞複合語であるが、その規定関係は、統語及び意味の観点からみることができ。

1. 3 名詞複合語の統語的及び意味的規定関係

名詞複合語の関係を統語関係に還元することは、生成文法に基づく複合語の研究がとった方法であっ

た。そこでは極めて多様な規定関係が仮定されている。しかし、最終的には、そのようなパラフレーズは恣意的なものと言える。そのような恣意的に設定された深層構造から複合語の構造を説明することは、必ずしも妥当であるとは言えなからう。例えば、自動車のエンジン Automotor を Motor, der ein Teil eines Autos ist の様にパラフレーズすることは、ひとつの可能性であって、そのみではない。なぜ Motor des Autos とする分析は妥当とは言えないのか、説得的な理由はないように思われる²⁾。さらにまた、この論文の主題である前照縮約名詞複合語に関しては、そのようなパラフレーズは、想定できない。

規定的な名詞複合語を意味論の観点からみると、6つのタイプが存在する。第1のタイプは、弁護士事務所 Anwaltsbüro のように、所有関係にある結合 possessive Zusammensetzung である。2番目は、有刺鉄線 Stacheldraht のように、部分関係を表している結合 partitive Zusammensetzung である。3番目のタイプは、皮手袋 Lederhandschuh がその例となるが、素材関係を表している結合 materiale Zusammensetzung である。4番目は、赤字経営 Verlustgeschäft のように、第2の構成要素の意味内容を第1の構成要素が説明しているもの explikative Zusammensetzung である。5番目に、ピラミッドのように高い屋根 Pyramidendach を典型例とする、比較を表している結合 Vergleichszusammensetzung がある。最後に、蜜蜂 Honigbiene に見られるように、第1の構成要素が第2の構成要素で表されているものの生産物であるというタイプ effizierende Zusammensetzung がある。他にも場所（水上飛行機 Wasserflugzeug）や時間（早期年金受領生活者 Früherrentner）、道具（魚切り包丁 Fischmesser）、条件（非常ブレーキ Notbremse）等の関係を表した結合がある。

2 アド・ホック構成一般

日々登場するアド・ホック構成は、1節で述べた造語一般の規則に従っているものもあるが、それ以上に、そういった一般規則から外れていると思われるものが多い。造語の一般的規則は、そういった表現を理解する手がかりを与えはするが、それはあくまでも手がかりにしか過ぎない。アド・ホック構成がつくられる動機が、多様なものであるからである。そういった表現をつくりだす動機 Motivation には、第1節でみてきた統語及び意味的なもの以外に、次に挙げる5つが考えられる³⁾。

第1には、形態統語的な動機づけである。例えば、これは、einsam という語の存在から zweisam をつくり、Nachtigall という語との類似で Tagtigall をつくるといったことである。日本語の例としては、冷蔵庫から冷凍庫がつくられた過程と言える。

第2には、形態意味的な動機づけが考えられる。

新語が生み出される過程で一番重要な役割を果たしているのが、コンテキストに基づく動機づけである。これには、同一物を指示する表現の繰り返しに関わるものと、統語上の並列現象に関わるものがある。

同一物を指示する表現の繰り返しとは、例えば、ラム酒の壺に入ったアイスクリーム Eis mit Rumtopf → Eisrumtopf、黒の守護天使 ein schwarzer Schutzengel → Schutzengel あるいは、現金輸送

車 Geldtransportauto→Geldauto, 空軍基地 Luftwaffenstützpunkt→Luftstützpunkt といったような縮約表現, あるいはビデオディスクプレーヤー Bildplattenspieler→Bildmaschine, 偽装としての教育学 Pädagogik als Tarnung→Tarnungsfach と言い換えたりするものである。さらには, 同義的表現を連ねることが考えられる。これは, 例えば, 1979年における「スリーマイル島」(あるいは「ハリスバーグ」)と同じように, 1986年の「チェルノブイル」は, 原発事故の代名詞となった感があるが, そのチェルノブイル原発事故を報じた記事での Atomunglück→Reaktorunglück→Super-Gau→(Tschernobyl) といった言い換えや, Schneller Brüter の表題でフランスの高速増殖炉について報告している記事での der weltweit größte schnelle Brüter, genannt Superphenix→des Superphenix→dem gigantischen Betonkoloß→der Großbrüter→der fortschrittliche Brüter→der Reaktor→den gigantischen Reaktor (DER SPIEGEL, Nr. 47/1982: 71-76)⁴⁾ という一連の言い換えの表現が挙げられる。

統語上の並列現象とは, Kakao-, Tee- und Haferschleimheime あるいは Tod und Abertod といったものであるが, きわめて文学的表現であることが多いと言えよう。

新語を作り出す動機としては, 第4番目に他のテキストとの関わり Intertextualität がある。

最後に, 大きな要因として, 話し手あるいは書き手の意図に関わるものがある。テレビ TV→Flimmerkiste (あるいは可能性としては Blechtrottel), チーム Mannschaft→Frauschaft といった言い換えは, 語の2次的意味すなわちコノテーション Konnotation が大きく左右していると言えよう。

特に文学作品を眺めると, 作者の文体的配慮が大きな要因となっている場合が多い。例えば, 次のような詩にみられる Vorbild との関連でつくられた vorleben 及び vorsterben といった表現である。

Beim Nachdenken über Vorbilder : Die uns/vorleben wollen/ /wie leicht/das Sterben ist/
/Wenn sie uns/vorsterben wollten/ /wie leicht/wäre das Leben (Erich Fried 1966: 33)
(この例は, ザンディヒの著書 (Sandig 1986: 66) から取った。)

さらには次のベルンハルトからの引用が興味深い。

Es steigt der Steiger,/bis er nicht mehr steigt./Es schweigt der Schweiger,/bis er nicht mehr schweigt ... Es germanistelt der Germanist,/bis er nicht mehr germanistelt./Es slawistelt ... (Thomas Bernhard, Ahnenkult)

最後に, 新語を生み出す動機として, 特定の個人や出来事に関わるものがあることを付け加えておきたい。これは, 日本語での例でいえば, 「江川る (えがわる)」という新しく生み出された動詞であり, ドイツ語での類似の現象は lambsdorffen という動詞があった⁵⁾。

3 前照縮約名詞複合語

3.1 ラング/パロール複合語 (ゼッペネン)

アド・ホック構成 (複合語) の規定に関しては, ゼッペネン (Seppänen 1978) によるラング複合語 Langue-Komposita とパロール複合語 Parole-Komposita の区別が参考になるであろう。

ゼッペネンによると、ラング複合語とは、社会的に制度化された概念の表現であり、言語体系の構成要素としての2方向的な（つまり音声と意味内容から成り立っている）言語記号としての「語」であり、社会的な価値体系の構成要素と成ったものである。たとえば、Straßenlampeとは、決して自由な統語的結合に基づく複合語ではなく、唯一の対象を指示する語として、ここではドイツ語の体系で、すでにある位置を占めている。従って、これをLampe auf/neben/über/der Straßeとパラフレーズするのは恣意的に過ぎない。

これに対して、パロール複合語とは、テキストの内部でのみその意味が確定できる、明確な動機づけを伴った複合語である。例えば、その例として、Falladaの小説から次のような一文が引用される。Die alte Gnädige ... sah träumerisch die Teppichstelle an, auf der eben ihr Hausdrache gestanden. ここで言われている「絨毯のその箇所」とは、偶然に犬がいた場所であり、決して辞典の一要素として記載されているようなものではない。TeppichとStelleの関係は、偶然的なものであり、この場合はStelle auf dem Teppichといった表現で置き換えることができる。Teppichstelleの語が、たとえばStraßenlampeとは異なっていることは、次のような例文で明らかになる。

- 1) Der Hund stand auf jener Stelle auf dem Teppich da. Die Teppichstelle ist jetzt eigens markiert.
- 2) An der Straße dort verkauft man preiswerte Lampen. *Die Straßenlampen haben eine gute Qualität.

つまり、1)の文では、auf jener Stelle auf dem Teppich daをDie Teppichstelleで置き換えることが可能であるが、2)の文では、いわば「通りで売られているランプ」の意味でのLampen, die man auf der Straße verkauftをDie Straßenlampeで置き換えることはできない。それは、Straßenlampeが既に固定した意味を持っているためである、とゼッペネンは考える。そういった意味で、ラング複合語がひとつの読みしか持ちえないのに対し、パロール複合語は、原理的には無限の読みが可能である。もちろん、当該のコンテキストでは、明らかに一通りの読みしかできないことは言うまでもない。

つまり、Teppichstelleという複合語についていえば、それは、コンテキストによって「絨毯のその箇所」、「絨毯が置かれている場所」、「絨毯が売られている場所」、「絨毯が作られている場所」、「絨毯に到る場所」、「絨毯が保管されている場所」といった具合に、無限ともいえるパラフレーズが可能なのである。原理的にその意味が無限定で、多義的であるのがパロール複合語であるということになる。従って、コンテキストに動機づけられたアド・ホック複合語は、総じてパロール複合語であるといえよう。

ゼッペネンの規定によるパロール複合語は、ヴィルトゲン (Wildgen 1982) のいう前照複合語と同じものであるといえる。例えば、次の例にみられる Atomspatzen。

- (1) Herr X "entdeckte rings um das bayrische Atomkraftwerk Ohu zahlreiche Spatzen mit weißen Federn".
- (2) "die weißen Spatzen von Ohu".

(3) “die Atomspatzen” (Wildgen 1982 : 243)

先行コンテキストの内容に規定されて初めてdie Atomspatzenの意味が理解可能となっているのであり、その限りで、この複合語はこのコンテキストの中で一義的に規定されているといえる。

パロール複合語すなわちアド・ホック構成と、いわゆる新語 Neologismen の関係は、繰り返し使用されることによる違いと言える。つまり、あるひとつのアド・ホック構成が、ある程度繰り返し多くの言語使用者によって用いられることによって、新語であるとの認識が広まるといえる。そしてさらに繰り返し用いられ、その語がほぼ全ての言語使用者の言語能力の部分を成し、その当該言語体系の一要素として認知されるとき、ラング複合語となる。従って、ラング複合語もかつてはパロール複合語であったのであり、繰り返しによって、その構成要素間の規定関係が限定されてきたものである⁹⁾。

3. 2 例による考察(言語外コンテキストとの関わり)

アド・ホック構成の意味の理解がどれほど言語外コンテキストの理解に依存しているかを、さらにいくつかの例でみていきたい。

例えば、「雪崩閉山」(『朝日新聞』, 1987年7月3日(金))。事態としては、次々と炭坑が閉ざされて行くことが意味されているのだが、それがあたかも雪崩によって次々と立ち木が崩れ倒されていく様子に似ているということで、「雪崩閉山」という複合語が生まれたものであろう。他方、「雪崩現象」という語の存在が、「雪崩閉山」の理解を助けている。しかも雪崩は常に災害であり、決して好ましいものではありえない。従って、雪崩の語には否定的なコンnotationが伴っている。雪崩の語を構成要素とする複合語は、常にマイナスの価値判断を伴っているといえよう。現象的には、会社の倒産も「雪崩倒産」と呼ばれるものがありうる。そうすると、「連鎖倒産」と「雪崩倒産」とは、どのように違うのだろうか。「連鎖倒産」が、ある会社の倒産によってそれと取引のあった会社が次々に資金運用面で苦境に陥って倒産することであるとするならば、「雪崩倒産」とは、かつての世界恐慌時のように、殆ど同時的に多くの会社が次々に倒産して行くことを意味することになるであろう。ついでながら、「連鎖倒産」の語そのものは、原子物理学での「連鎖反応」という用語の理解に依拠していると考えられる。

ドイツ語における似た例を挙げると、Lawine, Dachlawine, Preislawine といった語がある。Lawineの意味は、『ドゥーデン』(Duden 1983 : 770)によると、山の斜面から滑り落ち(その過程で巨大になっていく)雪或は氷 an Gebirgshängen niedergehende (und im Abrollen immer größer werdende) Masse von Schnee oder Eis となっており、つまり雪崩である。比喩的には、例えば eine Lawine von Zeitschriften, die rollende Lawine der Ereignisse といった使い方が挙げられている。ほぼ Lawine と同じ意味で使われているものに Schlaglawine がある。この語の意味は、グリムの『ドイツ語辞典』によると、山から落ちて来て、木や家をなぎ倒す雪 von den bergen herabfallender schnee, der bäum(e) und häuser niederschlägt となっている。この説明を読めば、Schlaglawine の語そのものの構成は明らかであろう。それならば Lawine の意味が分かれば、Dachlawine の意味が、この複合語の構造のみから理解できるかということ、そうではない。これは、屋根 Dach が雪崩 Lawine

のように落ちて来るのではなく、屋根から落ちて来る雪 von einem Hausdach abrutschende Schneemasse のことである。それならば、Preislawine は、Dachlawine と同じ様な原理で作られた複合語であると見なし、そのように理解してもいいと思われるのに、実際は、ものの価格 Preis を雪崩のように引き下げることである。大盤振舞いの値引きを意味しているのである⁷⁾。

「東芝騒ぎ」(『朝日新聞』, 1987年7月4日(土))が世間を賑わしている。「東芝騒ぎ」とは、一体何か。騒ぎの語を「騒動」と同義と見なししていいならば、歴史的事件としての「米騒動」の語が思い浮かぶ。さらに「〇〇騒動」といった農村一揆も思い浮かぶであろう。こういった語は、「東芝騒ぎ」の語の理解をある程度助けるといえるが、十分ではない。これは、長い過程の事件を捉えた言い方であり、単に「東芝機械が共産国であるソ連へ不正に軍事物資を輸出したことをめぐる騒ぎ」ということでは、その意味を正確に言い表したことはない。その輸出に至る過程及び日米関係に及ぼしたその事件の影響も含めての現在まだ進行中の出来事を、この「東芝騒ぎ」の語は意味していると考えられる⁸⁾。

ウィーンでのテロ騒ぎの過程で新聞に登場した語に Briefbombe がある。この語は、既に辞典に記載されており、意味は封を開いたときに爆発するような爆発物の入った手紙 Brief, der Sprengstoff enthält, der beim Öffnen explodiert と説明されている。しかし、そもそもこの語が最初に使用された状況を想像してみると、次のようなことが言えるであろう。

先ずこの語は、原子爆弾 Atombombe や水素爆弾 Wasserstoffbombe という既存の語の理解に基づいて理解可能と思われる。しかし、この類推は、効かない。試みに『ドイツ語逆引き辞典』(Rückläufiges Wörterbuch : 1970)で -bombe のついた複合語を調べてみると、21ある。それらの語はいずれも爆弾の素材やその効果を言い表したものである。他方、Brief- を構成要素とする複合語を検討してみると、郵便箱 Briefkasten, ペンフレンド Brieffreund, 郵便配達人 Briefträger といった語がある。こういった語の理解からすると Briefbombe とは、「手紙を素材とする爆弾」ということで、大量の非難や抗議の手紙であるかのように思われる。あるいは、第1節で述べられた繫辞的複合語の例であるとも考えられるが、繫辞的複合語の各構成要素が、ほぼ同一か近似の語場に属する語から成っているのに対し、Briefbombe の各構成要素は、語場の点では互いに何の関連もない。Sexbombe = Frau, besonders Filmschauspielerin, von der eine starke sexuelle Reizwirkung ausgeht (Duden 1983 : 1154) という語は、その構成は他の複合語と同じように、材料を表している Sex が Bombe の前に付いていると考えられるが、意味の点では比喩的な複合語であると言えよう。従って、初めて Briefbombe の語が登場したときには、実際の対象そのものが認知されていることが前提としてあったと言えよう。

最後に「靈感商法」を取り上げる。これの実態は、単に「靈感による商法」というパラフレーズで捉えられるものではなかろう。そのあくどいまでに多様な商法の実態に対するレッテルとして考案され、使用されているものであろう⁹⁾。

3. 3 前照縮約名詞複合語 (言語的コンテクストとの関わり)

ここでいう前照縮約名詞複合語とは、既に3. 1節で引用した Atomspatzen がそうであるといえ

る。さらに例を挙げて、より詳しくその理解のプロセスを検討してみよう。

例1：次の例文に出てくる「発見者の眼差し Entdeckerblick」という表現。これは、どのように理解されるであろうか。

Die Induktion in jeder Form sogar ist von diesem und jenem Kritiker schon abgelehnt worden. Auch darüber, meine ich, sollte eine philosophische Besinnung rasch hinwegführen, indem sie schärfer, als das zu geschehen pflegt, unterscheidet zwischen Intuition und Beweis. Es ist etwas Herrliches zweifellos um *den genialen Blick des Entdeckers*, um jenen Blick, mit dem Goethe z. B. die Urform der Pflanzen aus einem oder einigen Exemplaren herauszuschauen glaubte. Solch *ein Entdeckerblick* ist den forschenden Psychologen unserer Zeit mehr als je vonnöten (Bühler 1926 : 456).

複合語の構成原理からすると、日本語訳が暗示しているように Entdecker と Blick の関係は、所有関係を表しているといえる。実際に、この語が現れている文に先行する文では *den genialen Blick des Entdeckers* と所有関係が明示されている。つまり Entdeckerblick とは *den genialen Blick des Entdeckers* の縮約表現であると考えられる。そこには、表現の簡潔性及び同一表現の繰り返しを避けるというスタイル上の配慮があるといえる。

例2：次の引用文に見られる Einheitsmystiker の語。この語は、どのように理解したらいいのだろうか。

Die Vielheit der Sinneseindrücke beispielsweise wird als \rangle Abfall vom Sein \langle bezeichnet, oder als ein \rangle relatives Nichts \langle , und es gilt als Aufgabe der geistigen Seelenvermögen, diese Mannigfaltigkeit als höhere, geistige Einheiten zu erfassen. Für *den Einheitsmystiker* Eckehart ist bekanntlich dieser Gegensatz zwischen Einheit und Vielheit von entscheidender Bedeutung, er führt in der letzten Konsequenz zur radikalen Verabsolutierung der ersteren (Seppänen 1985 : 33).

まず手がかりを -mystiker を構成要素とする名詞複合語に求めてみよう。『ドイツ語逆引き辞典』で調べてみると、残念ながらこれに類する名詞複合語はひとつもない。それであるならば、mystifizieren という動詞と同じ様な theoretisieren と関連のある -theorie のついた複合語を調べてみることにしよう。場の理論 Feldtheorie を始めとして、全部で39が挙げられている。これらの複合語の規定関係を調べてみると、いずれも当該理論の対象が第1の構成要素となっている。つまり、Theorie を動詞的に理解し、その目的語として第1の構成要素が置かれていると考えられる。いわば theoretisieren という動詞の目的語となっているともいえる。すると、theoretisieren する者としての Theoretiker を構成要素とする、例えば Relativitätstheoretiker という語は、「相対性理論を唱える理論家」といった意味になると理解される。それであるならば、Einheitsmystiker という語の意味は「統一、あるいは一体性を神秘化する者」ということになるのだろうか。先行するコンテキストから読み取れる意味は、しかし、そうではない。この語は、言葉の意味をエックハルトがどのようなものと考えていたかを理解すること

なくしては、了解不能と言えるであろう¹⁰⁾。

4 まとめ

とりわけジャーナリズムでの使用が目立つといえるが、前照縮約名詞複合語の理解は、単に当該言語の構成規則を知っているだけでは十分ではなく、そういった語が指している事態そのものについての知識 Sachwissen が極めて重要な役割を演じている。すなわち、ビューラーが複合語の理解について述べたことは、依然として妥当であるといえる。

複合語の意味理解についてビューラーは、結論的に次のように述べている。

「しかし結局の所、どのような体系的な扱い方であっても、内容を説明する必要に迫られるだろうが、複合語の多くの意味がただ暗示的にとどまり、その素材から意味の精密化を必要とすることは、例えば、炉 Backofen, 瓦 Backstein, 干し果物 Backobst などのような、繰り返し用いられている一連の複合語についてみられる通りである」(Bühler 1965 : 341)¹¹⁾。

一度成り立った理解の仕方、つまりその複合語の分析的理解は、新しく登場してくる、つまり新しくつくられる複合語を理解するための一応の手がかりを提供してはくれるが、決してそれだけでは十分ではない。最終的には、事柄そのものについての知識が決め手となる。テキストにおける前照縮約名詞複合語の理解については、とりわけコンテキストの役割が重要である。我々は、その例をゼッペネンの著書における Einheitsmystiker という複合語の理解にみた。

5 注釈

1) 新しい命名語が必要とされる時、これも『小百科事典ドイツ語』によると、次の4つの方法によって解決される。すなわち、意味の変化 Bedeutungswandel, 借用 Entlehnung, 慣用句化 Phraseologisierung, そして造語 Wortbildung である (Deutsche Sprache : 243)。

2) Automotor に関して、ゼッペネンは、いくつかの深層構造に還元されうるが故に、極めて恣意的であるとし、Automotor → Motor eines Autos/Motor des Autos/Motor von Autos/Motor der Autos というキュルシュナーによるパラフレーズ (Kürschner 1974 : 97) を挙げている (Seppänen 1978 : 135)。

3) 以下、形態的観点からの記述は、1986/1987年の冬学期にウィーン大学言語学研究所でのドレスラーの「ドイツ語形態論」と題する演習で知りえたことを基にしている。内容的には、ほぼヴィルトゲン (Wildgen 1982) と重なっているが、他の例が補充されていた。本論文では、さらに日本語の例をも付加して、対照言語学的な考察を目指した。

4) こういった同義的表現による言い換えは、とりわけ新聞や時事に関する週刊誌などに特徴的ともいえる。そこには、同一語句の繰り返しを避けるという文体的配慮以外にも、新情報を盛り込んで伝えながら、なお簡潔な表現を目指すという多重の理由が介在している。それは Super-Phenix に関する上記の DER SPIEGEL の言い換えにも表れている。フランスの高速増殖炉が世界最大かつ最新のものであ

り、スーパー・フェニックスと名付けられているといったことが、一連の同義的な言い換えの表現で読者に伝えられている。こういった簡潔な表現を生み出す一番の理由は、物理的なものといえる。つまり、紙面が限られているということである。その例を次に挙げる。これは、ヒマラヤで雪男 Yeti に遭遇したということで話題になったオーストリアの登山家に関するものである。極めて短い記事の中で、メスナーに関する重要な情報はすべて盛り込まれている。

"Gipfelstürmer/Messner heute/am Telefon/ /Wollen Sie mit Superkletterer Reinhold Messner, Bezwingen aller 14 Achttausender dieser Erde, reden? Möchten Sie ihn fragen, ob er den Yeti tatsächlich gesehen hat? Messner ist heute, Donnerstag, von 14,30 bis 15.30 Uhr am KURIER-Telefon. Rufen Sie an: Wiener Vorwahl (0 22 2) und 96 21/305,306." (KURIER, 5. März, 1987)

5) ドイツ語に関していえば *lambsdorffen* という動詞が作られた原型は、おそらく *Hamster*→*hamstern* という派生にある。なお、日本語の「する」という動詞は、あらゆるものを動詞化する力を持っているが、近年これによっ作られている動詞が増大している。ここでの連関では、「タケシする」という動詞を挙げることができる。これも「江川る」と同様、特定個人の振舞いがその意味を規定している。

6) ヘリンガーの言葉でいうと、次のようになる。「複合語が文から凝縮されてつくられるのではなく、むしろ複合語の方が意味関係を伴った統語関係を作る、より原初の生産的な形態である……」(Heringer 1984: 11)。

7) 但し、この語に関する『ドゥーデン』による説明は、筆者の経験による理解とは逆の意味(天井しらずの物価高騰 *unaufhaltsamer Preisanstieg*) が掲げられている (Duden 1983: 971)。実際の所は、両方の意味で用いられうるようである。

8) 記事での説明によると、「東芝の会長、社長辞任にまで発展した東芝機械による対共産圏輸出統制委員会(ココム)違反事件」であるとなっている。

9) 新聞の記事の中では、「靈感商法」とは、『先祖のたたりがある』といって相手を不安にさせて印鑑、壺、多宝塔などを買わせる」商法であると説明されている。

10) 中世の神秘思想では、神との神秘的合一 *unio mystica* ということが目標とされていた。従って、ゼッペネンの *Einheitsmystiker* という複合語は、そのラテン語を下敷にして作られている可能性がある。しかし、*unio mystica* が意味していることは、*Einheitsmystiker* が使われているコンテキストに基づくこの語の理解とは異なっている。従って、ここでは、あくまでもコンテキストに基づく理解を考察の中心に置くことが適切であろう。

ゼッペネンの説明によると、エックハルトを代表とする中世スコラ学者は、言葉の意味について、およそ次のように理解していた。神によってつくられた被造物としての人間は、事物を命名することによって、この世界を認識していく。この認識活動は、それによってこの世界が見えてくるという意味で、極めて活動的で創造的な営みである。命名語は、事物の本性を体現したものであり、終局的には神におけるアイデアを顕現しているものである。しかし、心の言葉 *verbum cordis* として直感的に捉えられた事

物の本性は、被造物である人間の中でイメージを伴う内的言語 *verbum interius* を経て、外に向かって表現されたものとしての音声言語 *verbum vocis* となる時、不完全で不純である人間の中で曇らされてしまう。外的言語は、アイデアそのものの微かな輝きしか体現しえない。従って、語の意味は、不変で常に一であるといっても、命名活動によってこの世界を認識することは、被造物として不完全なものである人間にとっては、夾雑物を排除しつつ段階的に神のアイデアの認識に到ることでなければならない。ゼッペネンによる *Einheitsmystiker* の語は、先行コンテクストにおける以上のような理解を基にして初めて理解可能であるといえる。

11) ゼッペネンも同様の主張をしている。ラング複合語の例としては、露天掘り *Tagebau* が挙げられる。ドイツ語の構成規則からすると、*Tag* と *Bau* が何らかの関係で結合されているとしか言えない。その意味の精密化は、言語外の事態に関するしかるべき知識に基づいて初めて可能となる。なお、ヘリンガー (Heringer 1984) は、コンテクストから切り離して、パラフレーズによって何らかの統語関係に還元していくというキュルシュナーの研究の不十分さ、過ちを指摘しているが、ヘリンガーは活性化された知識 *das aktivierte Wissen* = *Das Laufwissen* という概念を用いて名詞複合語の理解を説明する方が、より説得的であるとしている。テキストにおける名詞複合語の理解とその機能を考察しているという点では、デダーディング (Dederding 1983) の研究も同じ方向にある。ハントヴェルカー (Handwerker 1982) は、タイトルが示しているように、名詞複合語に関してコンテクストから自由な使用と、コンテクストに条件づけられた使用を区別しているが、コンテクストに条件づけられた名詞複合語の理解は、話し手と聞き手が持っている世界に関する知識、発話の状況及び言語的コンテクストの理解に依存していると思なしている。

6 参考文献一覧表

- Bühler 1926 : Karl Bühler, Die Krise der Psychologie. In : *Kant-Studien*, 31. Bd., S. 455-526.
- Bühler (1934) 1965 : Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache. Jena, (Gustav Fischer Verlag).
- Dederding 1983 : Wortbildung und Text. Zur Textfunktion (TF) von Nominalkomposita (NK). In : *Zeitschrift für germanistische Linguistik (ZGL)*, 11, S. 49-64.
- Deutsche Sprache 1983 : Kleine Enzyklopädie Deutsche Sprache, Leipzig, (VEB Bibliographisches Institut).
- Duden 1983 : Duden. Deutsches Universalwörterbuch. Mannheim/Wien/Zürich (Bibliographisches Institut).
- Handwerker 1982 : Brigitte Handwerker, Zum freien und bedingten Gebrauch von Nominalkomposita im Deutschen und im Französischen. In : *Zeitschrift für Sprachwissenschaft*, 1, S. 35-43.
- Heringer 1984 : Hans Jürgen Heringer, Wortbildung : Sinn aus dem Chaos. In : *Deutsche Sprache*, H. 1, S. 1-13.
- Kürschner 1974 : Wilfried Kürschner, Zur syntaktischen Beschreibung deutscher Nominalkomposita.

- Auf der Grundlage generativer Transformationsgrammatiken. Tübingen (Max Niemeyer Verlag).
- Lühr 1987 : Rosemarie Lühr, Neuhochdeutsch, München, (Wilhelm Fink Verlag).
- Rückläufiges Wörterbuch 1970 : Erich Mater, Rückläufiges Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, Leipzig (VEB Verlag Enzyklopädie).
- Sandig 1986 : Barbara Sandig, Stilistik der deutschen Sprache, Berlin / New York, (Walter de Gruyter), (Sammlung Göschen 2229).
- Seppänen 1978 : Lauri Seppänen, Zur Ableitbarkeit der Nominalkomposita. In : ZGL, 6, S. 133-150.
- Seppänen 1985 : Meister Eckeharts Konzeption der Sprachbedeutung. Sprachliche Welterschöpfung und Tiefenstruktur in der mittelalterlichen Scholastik und Mystik? Tübingen (Max Niemeyer Verlag).
- Seppänen 1986 : Leere Bedeutungen, Falsche Namen? Okkasionelle (und andere) Komposita aus referenz- und sprachsemantischer Sicht. In : ZGL, 14, S. 86-97.
- Wildgen 1982 : Wolfgang Wildgen, Makroprozesse bei der Verwendung nominaler Ad-hoc-Komposita im Deutschen. In : Deutsche Sprache, 10. Jg., S. 237-257.

Modalwort と情報構造

大 矢 俊 明

0. ドイツ語の Modalwort (以下 MW と省略) には他の副詞類には見られない数々の統語的特徴がある¹⁾。

イ. MW は否定されない。

(1) Peter kommt nicht wahrscheinlich/leider/schnell.

ロ. MW は疑問文・命令文・願望文に生じしない。

(2) Kommt Peter wahrscheinlich/leider/schnell?

(3) Komm wahrscheinlich/leider/schnell her!

(4) Käme er doch wahrscheinlich/leider/schnell!

これらの言語事実を説明するのに、発話としての文の意味内容を、ある世界における事態を記述する「命題」と、それに対する話し手の判断を表す「モダリティ」とに区別することが有効であると考えられる(中右, 1980: 159)²⁾。否定は命題内においてのみ機能するものであるが、MW は命題とは異なるレベルであるモダリティの表現手段であるため、そこまで否定が及ぶことはなく、また他のモダリティ表現である疑問・命令・願望とは意味上衝突するため(2)-(4)において MW は容認されない。一方、命題内で機能する副詞 schnell にはこのような制限はない。本稿ではこのような論理的な区別をふまえた上で、モダリティの一表現手段である MW と、テキストを構成する文の情報構造との関係を若干考察してみたい。

1. MW の語順は一見自由であるが、決してそうではない。ここでは文の中域にのみ着目するが³⁾、例えば(5)および(6)において、MW は不定冠詞がついていたり、あるいは冠詞が全くついていない「不定」の名詞句の後ろに位置することはできない。

(5) a. Er hat wahrscheinlich/leider ein Auto geklaut.

b. *Er hat ein Auto wahrscheinlich/leider geklaut.

(6) a. Er hat wahrscheinlich/leider Geld mitgenommen.

b. *Er hat Geld wahrscheinlich/leider mitgenommen.

しかし(7)に示すように、MW は常に「不定」の要素の後ろに位置することができないというわけではない。

(7) Diese Überlegungen werden allerdings einen eingefleischten Anhänger der absoluten Fokuskonzeption möglicherweise nicht beeindrucken.

ここでの不定冠詞は「総称的」と解釈されるものであり、このような場合には MW は「不定」の要素の後ろに位置してもよい。

したがって MW の語順を統御している原理は「定」——「不定」の対立ではなさそうである。さらに定冠詞のついた名詞句と MW の語順の関係をみると、(8)に示すように MW は定冠詞のついた名詞句の前後どちらにも位置することができる。

(8) a. Er hat wahrscheinlich/leider das Auto geklaut.

b. Er hat das Auto wahrscheinlich/leider geklaut.

そこで今度は MW の語順と文のテーマ・レーマ構造との関連を考察してみよう。何をもちいてテーマないしレーマとするかは議論のあるところだが、ここでは「発話時において聞き手にとって新しいと話し手が思っている情報」のことを「レーマ」とし、それ以外の部分を「テーマ」とする(幸田, 1982: 29)。レーマは新しい情報として新たにテキストに導入され、不定冠詞や「通常アクセント」と呼ばれる文アクセントにより表現される⁹⁾。またテーマは古い情報として定冠詞や代名詞で表現されることが多い⁹⁾。さらにある文に対し、その文が返答として機能できるような補足疑問文を作成してみた時、疑問詞で置き換えられる部分がレーマ、それ以外の部分がテーマに相当し、文のどの部分がテーマないしレーマであるかは、この「疑問文テスト」によってある程度検証することができる。上記各例文をテーマ・レーマ構造の観点からもう一度見直してみると、まず例文(5)および(6)から、「不定」で新しくテキストに導入されレーマと解釈される要素の前に MW が位置している場合には容認されることがわかる。また、例文(7)において MW は不定冠詞のついた名詞句の後ろに位置しているが、この場合の不定冠詞は総称的用法であり「～というもの」という、あるひとまとまりのものを表現している。これは聞き手の知識に概念的に既に含まれているものであるから、一種のテーマを示していると考えられるであろう。さらに例文(8)を見てみると、(8) a. は(9)の疑問文に対して返答として機能するが、(10)の疑問文に対しては機能しない。また(8) b. は(9)の疑問文に対して返答として機能できないが、逆に(10)に対しては機能できる。

(9) Was hat er geklaut?

a. Er hat wahrscheinlich/leider das Auto geklaut. (= (8) a.)

b. *Er hat das Auto wahrscheinlich/leider geklaut. (= (8) b.)

(10) Was hat er mit dem Auto gemacht?

a. *Er hat wahrscheinlich/leider das Auto geklaut. (= (8) a.)

b. Er hat das Auto wahrscheinlich/leider geklaut. (= (8) b.)

以上の考察から、MW の中域における語順について次のような原則を設定することができよう。

(11) MW はレーマの前に位置する⁹⁾

発話内容に対する話し手の判断であるモダリティの一表現手段としての MW は、一般に「文副詞」とも呼ばれ、文あるいは命題全体に作用するといわれる。しかし MW の語順が自由ではなく文のレーマの前に位置するということは、MW がある脈絡に埋め込まれた現実の発話において、文あるいは命

題を構成する要素のうち、レーマに意味上密接に結びついていることを示しているであろう。さらにこのことは、当該の脈絡において MW のあらかず話し手の判断が直接赴くのはレーマであることを意味しているように思われる⁷⁾。そもそも話し手にも聞き手にも明らかであり、両者間で既に前提となっているテーマに話し手が新たに判断を加えて操作することはできないはずであり、その話し手の判断は当該の脈絡において新しい情報であるレーマに向けられてこそ意味ある伝達行為をなすものと考えられる。したがって、さらに上位文や心態詞のような MW 以外のモダリティ表現によって表現される話し手の判断も、現実の発話においてはレーマに向けられているということになるだろう。

2. MW は(12)に示すように前置詞句を伴って文頭に現れたり、(13)に示すように名詞句に埋め込まれて使用されることもある。

(12) a. Wahrscheinlich infolge überhöhter Geschwindigkeit kam ein Personenwagen von der Fahrbahn ab.

b. Vermutlich um der schönen blauen Augen seines Partners willen, habe er die Rechnung dann doch nur auf 2900 km ausgestellt.

(13) a. Er hat eine zweifellos gute Dissertation geschrieben.

b. Der wahrscheinlich bekannteste Autor auf diesem Gebiet hält heute einen Vortrag in München.

c. Er ist ein vielleicht bedeutender Gelehrter.

まず、(12)のように MW が前置詞句を伴って文頭に現れた場合についてであるが、ここでは MW に続く前置詞句が必然的に文アクセントを受け、レーマと解釈される。

(14) a. Wahrscheinlich infolge überhöhter Geschwindigkeit kam ein Personenwagen von der Fahrbahn ab.

b. *Wahrscheinlich infolge überhöhter Geschwindigkeit kam ein Personenwagen von der Fahrbahn ab.

(15) a. Vermutlich um der schönen blauen Augen seines Partners willen, habe er die Rechnung dann doch nur auf 2900 km ausgestellt.

b. *Vermutlich um der schönen blauen Augen seines Partners willen, habe er die Rechnung dann doch nur auf 2900 km ausgestellt.

(12)のように MW が前置詞を伴って文頭に現れた場合も、MW は文のレーマの前に位置していることが明らかである。前置詞句以外にも、ある要素が MW と共に文頭に現れた場合、その要素はレーマでなくてはならないようである。このことは次の対話テキストや、文アクセント付与から確認できよう。

(16) Wer hat das Buch gestohlen?

a. Vermutlich Peter hat das Buch gestohlen.

b. *Vermutlich das Buch hat Peter gestohlen.

(17) Was hat Peter gestohlen ?

- a. Vermutlich das Buch hat Peter gestohlen.
- b. *Vermutlich Peter hat das Buch gestohlen.

(18) a. Möglicherweise deshalb fand der Berliner Chirurg Emil Böcherl in Bonn ein offenes Ohr, als er um Forschungsgelder für die Entwicklung eines künstlichen Herzens bat.

- b. *Möglicherweise deshalb fand der Berliner Chirurg Emil Böcherl in Bonn ein offenes Ohr, als er um Forschungsgelder für die Entwicklung eines künstlichen Herzens bat.

(19) a. Vielleicht um derartige Spekulationen nicht gar zu sehr ins Kraut schießen zu lassen, hat die offizielle sowjetische Nachrichtenagentur Tass nun am Montag ein Informationsbulletin über die Bauvorhaben auf dem Roten Platz veröffentlicht.

- b. ?Vielleicht um derartige Spekulationen nicht gar zu sehr ins Kraut schießen zu lassen, hat die offizielle sowjetische Nachrichtenagentur Tass nun am Montag ein Informationsbulletin über die Bauvorhaben auf dem Roten Platz veröffentlicht.

次に(13)のように MW が名詞句に埋め込まれた場合であるが、このような文の構造のとらえ方について、これまでいくつかの提案がなされている。岡田 (1985) は生成文法の枠組みで、名詞句内に MW を派生させる「二次的な句構造規則 (NP→Adv N)」を提案しているし、井口 (1986) は(13)のような場合、MW が論理的に命題の上位の構造にあることを示す $M(p)$ (M はモダリティ, p は命題) という図式があてはまらないとし、MW は命題の枠外から単一の要素に作用すると述べている。さらに Helbig / Buscha (1984 : 504) は、(13) a. の MW が gut に作用するようにみえるのは表面的なことで、深い構造においてはやはり文全体に作用するとし、(13) a. は次のようなふたつの文から派生したものであるとする。

(20) Er hat eine Dissertation geschrieben. Die Dissertation ist zweifellos gut.

確かに(13) a. の MW は単一の形容詞 gut に作用するようにみえるが、その作用の仕方は命題内で機能し、明らかに単一の語のみに作用する副詞とは異なる。それは、例えば程度の副詞のひとつである sehr と (13) a. における MW の否定や疑問に関する統語的振る舞いを比較してみれば明らかである。

(21) Er hat eine sehr gute Dissertation geschrieben.

(22) a. *Er hat keine zweifellos gute Dissertation geschrieben.

- b. Er hat keine sehr gute Dissertation geschrieben.

(23) a. *Hat er eine zweifellos gute Dissertation geschrieben?

- b. Hat er eine sehr gute Dissertation geschrieben?

(23) の MW も命題とは異なるレベルのモダリティの表現であるため、(1)や(2)と同じ理由で、やはり否定されたり疑問文に生起することはない。

これまで MW はレーマの前に位置することを述べてきたが、(13)においても MW の直後にある形容詞が必然的に文アクセントを受け、レーマと解釈される。

⑭ a. Er hat eine zweifellos gute Dissertation geschrieben.

b. *Er hat eine zweifellos gute Dissertation geschrieben.

⑮ a. Der wahrscheinlich bekannteste Autor auf diesem Gebiet hält heute einen Vortrag in München.

b. *Der wahrscheinlich bekannteste Autor auf diesem Gebiet hält heute einen Vortrag in München.

⑯ a. Er ist ein vielleicht bedeutender Gelehrter.

b. ?Er ist ein vielleicht bedeutender Gelehrter.

MW が名詞句に埋め込まれた場合でも MW は文アクセントを受けるレーマの前に位置しており、やはりこのような場合にも⑪の原則があてはまることがわかる。しかしここでよく注意してみると、⑫および⑬にはそれぞれ文アクセントを受けレーマとなる要素以外にも、「不定」でかつ新しくテキストに導入された要素があることがわかる。すなわち⑫ a. では ein Personenwagen, b. では 2900km, また⑬ a. では eine Dissertation, b. では einen Vortrag halten, c. では ein Gelehrter といった語句である。これらの要素は新しくテキストに導入されたものであるから、それぞれの文から MW を削除した⑰および⑱において無標の場合、文アクセントを受けレーマとなるものである⁹⁾。

⑰ a. Infolge überhöhter Geschwindigkeit kam ein Personenwagen von der Fahrbahn ab.

b. Um der schönen blauen Augen seines Partners willen, habe er die Rechnung dann doch 2900 km ausgestellt.

⑱ a. Er hat eine gute Dissertation geschrieben.

b. Der bekannteste Autor auf diesem Gebiet hält heute einen Vortrag in München.

c. Er ist ein bedeutender Gelehrter.

すなわち⑫および⑬のような文においては、初めてテキストに導入された本来レーマとなるべき要素があるにもかかわらず、話し手は他の要素をレーマとして聞き手に提示し、そしてそのレーマの前に MW を挿入したものと考えられる。ここで話し手は、本来ならばレーマとして文アクセントを受けるべき要素をも、テーマとして前提されたものとしているのである。しかし、このような要素は不定冠詞を伴い初めてテキストに導入されたものであるから、やはり他のテーマとは性質が異なるといわざるを得ない。そこでこのような、テーマではあるのだが同時にレーマ的な側面をも兼ね備えた要素を含むテーマ・レーマ分節が存在するという事実を説明するために、「二層ないしは二重のテーマ・レーマ構造」というものを考えることができるのではないだろうか。すなわち、話し手が MW の後ろにある要素をレーマとして提示するにしたがい、本来レーマとなる要素がテーマの解釈を強いられるということをもととのテーマ・レーマ構造の上にもう一層のテーマ・レーマ構造がいわばかぶせられたと考えるわけである。すると、レーマ的側面をも兼ね備えているがテーマの解釈を強いられる要素は、上にかぶせられた層においてはテーマとして把握され、もともとの層においてはレーマとして把握されよう。ここで文アクセントを受け、文の最も重要な情報を担うものを「第一レーマ (R1)」, その第一レーマに対応

するテーマを「第一テーマ (T1)」とし、さらにレーマ的側面をも持つがテーマの解釈を強いられるものを第二の層におけるレーマ、すなわち「第二レーマ (R2)」とし、この第二レーマに対応するテーマ、すなわち純粋な旧情報を「第二テーマ (T2)」と規定すると、(12) a. の情報構造は(29)に示すように第一レーマは文アクセントを受ける前置詞句であり、第一テーマは不定冠詞のついた名詞句を含む ein Personenwagen kam von der Fahrbahn abあるいは単に ein Personenwagen kam ab というシンタグマであり、そして第二レーマも同様このシンタグマで、また純粋な旧情報である第二テーマはこの場合存在しないか、あるいは脈絡に応じて定冠詞を伴っている Fahrbahn のみと考えられる。

(29) R1 : infolge überhöhter Geschwindigkeit

T1 : ein Personenwagen kam von der Fahrbahn ab / ein Personenwagen kam ab

R2 : ein Personenwagen kam von der Fahrbahn ab / ein Personenwagen kam ab

T2 : ————— / Fahrbahn

また、(13) a. のように MW が名詞句に埋め込まれた場合のテーマ・レーマ構造は(30)に示すように、この文で必然的に文アクセントを受ける形容詞 gut が第一レーマ、またこの文から MW を削除した文において無標の場合に文アクセントを受けレーマとなるはずの eine Dissertation が第一テーマであり、そしてこのテーマ・レーマ構造の下にあるであろう、第二の層におけるレーマ、すなわち第二レーマは同様に eine Dissertation あるいは eine Dissertation schreiben というシンタグマであり、この第二レーマに対応する第二テーマは er hat etwas geschrieben あるいは er hat etwas gemacht といったものと考えられよう。

(30) R1 : gut

T1 : eine Dissertation

R2 : eine Dissertation / eine Dissertation schreiben

T2 : er hat etwas geschrieben / er hat etwas gemacht

ここで問題にしているような二層のテーマ・レーマ構造、すなわち話し手が本来レーマとなるはずの要素をテーマとして聞き手に提示してしまうことは MW を含む文に限られた現象ではない。次に Trojan (1961 : 35) のあげた例をみてみよう⁹⁾。

(31) In Todesangst folgte das junge Mädchen ... an den Weiher ; dort war im Schilf eine Öffnung, eine Treppe führte hinunter.

このテキストの第三文では通常、eine Treppe が文アクセントを受け、文全体がまるごとレーマとなるが、もし hinunter が文アクセントを受けた場合、eine Treppe はテーマの解釈を強いられ、この文は Hier gab es auch eine Treppe, sie führte hinunter. とパラフレーズできるという。この場合、eine Treppe は新しくテキストに導入されたものであるからレーマ的側面をも兼ね備えたテーマとなり、結局この文は次に示すような二層のテーマ・レーマ構造を持つものと考えられる。

(32) R1 : hinunterführen

T1 : eine Treppe

R2 : eine Treppe

T2 : es gab etwas

3. MWを含む文にしろ、(31)のような文にしろ、二層のテーマ・レーマ構造が認められるような文では話し手はレーマとなるはずの要素をあえてテーマとして聞き手に提示している。本来、情報の展開というものは、ひとつのテーマにひとつのレーマを順々に付与していくのが最も自然な形であろう。話し手は新しい情報を伝える際、まず聞き手にとって既知のものをよりどころにし、聞き手が理解しやすいところから述べ、情報を急に展開することは避ける。その際、もし(対話テキストであれば)聞き手が新しい情報について何か異議や疑問をはさめば話し手の情報の展開はそこでストップしてしまうであろう。つまり、テキストに新しく導入されたレーマが話し手・聞き手の間で了解されて初めて話し手は次の情報展開に移行することが可能となるのであり、さらに場合によりそのレーマが次の文のテーマとなることができるのである。ところが二層のテーマ・レーマ構造が認められる文においては、初めてテキストに導入されたレーマ的側面を持つものもテーマの解釈を強いられ、このような順を追っての情報展開を示さない。本来ならば複数の文(13)a.についていうなら(20)のふたつの文)でなされるはずの情報展開を、話し手のストラテジーとしてあえて凝縮した形で行っているのである。

また、このような二層のテーマ・レーマ構造が認められる文における情報展開の凝縮の仕方にはいくつかのタイプがみられる。(12)a.においては不定冠詞のついたレーマ的側面をもつ ein Personenwagenがテーマの解釈を強えられるわけであるから、Danešの「テーマ展開(Thematische Progression)」(Daneš, 1970および下川, 1979)であげられたパターンを引き合いに出していえば、話し手は(3)に示すような「先行文のレーマが次の文のテーマになる」「単純線状展開」と同様の情報展開を同一文中において行っていると解釈できる。

(3) Ein Personenwagen kam von der Fahrbahn ab.

R2

↓

Infolge überhöhter Geschwindigkeit kam ein Personenwagen von der Fahrbahn ab.

R1

T1

また(13)b.の場合、前もってわかっているある特定の著者についてふたつのこと、すなわちこの著者が今日 Münchenで講演を行うということと、この著者はこの分野で最も有名であるということとを述べており、後者が文アクセントを受けレーマとなり、前者は不定冠詞のついたシンタグマで表現されるにもかかわらずテーマの解釈を強いられる。この場合、これらふたつのことは同一のテーマである der Autorに付与されるのであるから、話し手は(34)に示すような「先行文のテーマが後続文においてもテーマとなる」「共通テーマ型」と同様の情報展開を同一文中において行っていると解釈できる。

(34) Der Autor hält heute einen Vortrag in München.

T2

R2

↓

Der Autor ist auf diesem Gebiet am bekanntesten.

T1

R1

4. 本稿では、モダリティの一表現手段である MW とテキストを構成する文の重要な一側面である情報構造との関連について考察した。話し手の判断と情報構造には、話し手の判断は新しい情報に向けられる、という原則的關係があるものと思われ、このことが MW の語順にも影響していると考えられる。さらに、ひとつのテーマにひとつのレーマを付与するという通常の情報構造ではなく、話し手の伝達上の方針により、ひとつの文に新しい情報を階層的におりこむことがあることを指摘した。テキストの情報構造は、テーマにレーマを順々に付与するという「線状的」性質の他に、テーマにもレーマ的側面をもつものがあることから「階層的」性質をも備えているといえそうである。テキストの情報構造を明らかにするには、このような「階層性」の考察を更に進める必要があると思われる。

注

- 1) MW の統語的特徴の詳細は Lang (1979 : 206ff.) および Helbig (1981 : 8ff.) 参照。
- 2) モダリティはさらに遂行表現のように発話行為をあらわすものと、話し手の心的態度をあらわすものとに二分されよう。MW は後者の表現である。
- 3) 以下の考察は Hentschel (1983) が心態詞 Abtönungspartikel について行った論考を参考にしている。
- 4) 以後、"´" によって文アクセント（文中の最も強いアクセント＝第一次アクセントで、以後特に断らない限り、レーマが受ける通常アクセントのことを「文アクセント」として言及する）を、"¨" によって第二次アクセントを示すことにする。
- 5) 定冠詞のついた要素でも、話し手が発話時に聞き手の意識に上っていないと考えれば文アクセントを受けレーマとなる。
- 6) Verhagen (1979) はオランダ語の文副詞について同様の結論を導いている。また、MW はレーマの前に位置するといっても、MW の後ろにあるものすべてがレーマであることを意味しない。まず次の脈絡において統語的に語順が決まっている枠構造終結成分 mitgenommen は MW の後ろに位置していてもレーマではないことは明らかである。
 - (i) (Was hat er mitgenommen?)
Er hat wahrscheinlich ein Buch mitgenommen.
さらにここで Lenerz (1977) が明らかにした基本語順に注意する必要があるだろう。
 - (ii) Wem hast du das Geld gegeben?
 - a. Ich habe dem Kassierer das Geld gegeben.
 - b. Ich habe das Geld dem Kassierer gegeben.
 - (iii) Was hast du dem Kassierer gegeben?
 - a. Ich habe dem Kassierer das Geld gegeben.
 - b. ?Ich habe das Geld dem Kassierer gegeben.

Lernerz は 3 格目的語—4 格目的語の語順の場合、そのどちらもレーマとなりうるが、4 格目的語—3 格目的語の語順の場合には後者がレーマでなくてはならないことからドイツ語においては 3 格目的語—4 格目的語の語順が基本であるとした。本来、レーマがテーマのあとにくるのがテキスト構成上自然な語順であるが、この統語的な基本語順を遵守する限りはその談話の流れに従わなくてもいいわけである。Lernerz は結局、次のような主文における基本語順を明らかにした。

(iv) 時間の副詞—(随意的) 場所の副詞—3 格目的語—4 格目的語—(義務的) 場所の副詞—前置詞句

(場所の副詞の語順は同一文に 3 つ以上の文成分があらわれた場所のみ問題になり、それ以外は随意的・義務的を問わず 4 格目的語—場所の副詞の語順になる。)

この基本語順を遵守する限りはテーマがレーマの後ろに立っても構わないわけであり、したがって(2)のように MW はレーマの前に立つといっても、MW の直後の要素はレーマであろうが、MW の後ろにある要素すべてがレーマであるとは限らないことが予想される。このことを確認するために、次の各質問に対してどの返答が最も適切かを 9 人のインフォーマントにたずねてみた。以下にその質問文と適切な返答であるとしたインフォーマントの数を示す。(各インフォーマントが提示した「適切な返答」はひとつに限らない。)

(v) Wem hat Konrad das Geld gegeben?

- a. Er hat wahrscheinlich dem Kassierer das Geld gegeben. (3)
- b. Er hat dem Kassierer wahrscheinlich das Geld gegeben. (1)
- c. Er hat wahrscheinlich das Geld dem Kassierer gegeben. (1)
- d. Er hat das Geld wahrscheinlich dem Kassierer gegeben. (6)

(vi) Was hat Konrad an deinen Bruder geschickt?

- a. Er hat wahrscheinlich ein Paket an meinen Bruder geschickt. (5)
- b. Er hat ein Paket wahrscheinlich an meinen Bruder geschickt. (0)
- c. Er hat wahrscheinlich an meinen Bruder ein Paket geschickt. (2)
- d. Er hat an meinen Bruder wahrscheinlich ein Paket geschickt. (5)

(vii) Wann hat Konrad in Berlin gearbeitet?

- a. Er hat wahrscheinlich im Frühjahr in Berlin gearbeitet. (2)
- b. Er hat im Frühjahr wahrscheinlich in Berlin gearbeitet. (1)
- c. Er hat wahrscheinlich in Berlin im Frühjahr gearbeitet. (1)
- d. Er hat in Berlin wahrscheinlich im Frühjahr gearbeitet. (5)

(viii) Wann hat Konrad meinem Bruder geschrieben?

- a. Er hat wahrscheinlich gestern deinem Bruder geschrieben. (4)
- b. Er hat gestern wahrscheinlich deinem Bruder geschrieben. (1)
- c. Er hat wahrscheinlich deinem Bruder gestern geschrieben. (2)
- d. Er hat deinem Bruder wahrscheinlich gestern geschrieben. (5)

(ix) Was hat Konrad in Berlin gekauft?

- a. Er hat wahrscheinlich dieses Buch in Berlin gekauft. (4)
- b. Er hat dieses Buch wahrscheinlich in Berlin gekauft. (2)
- c. Er hat wahrscheinlich in Berlin dieses Buch gekauft. (1)
- d. Er hat in Berlin wahrscheinlich dieses Buch gekauft. (5)

- (x) Wo hat Konrad auf deine Frau gewartet?
- a. Er hat wahrscheinlich am Bahnhof auf meine Frau gewartet. (4)
- b. Er hat am Bahnhof wahrscheinlich auf meine Frau gewartet. (1)
- c. Er hat wahrscheinlich auf meine Frau am Bahnhof gewartet. (1)
- d. Er hat auf meine Frau wahrscheinlich am Bahnhof gewartet. (5)

多少のゆれはあるが、どの例においても MW の後ろに立つ要素が(統語的に語順が決まっている枠構造終結成分を除いて)レーマのみであるもの(=d.)が返答として最も適切であるとしたインフォーマントの数が最も多く、これに次ぐのは自然な談話の流れに逆らっても(b)の基本語順を遵守したもの(=a.)である。このテスト結果から MW はレーマの前に立つが、基本語順を遵守する限り、MW の後ろにある要素すべてがレーマではないということが確認できたであろう。

7) Lang (1979 : 204) は MW の作用域を rhematisch であるとし、さらに Petöfi (1974) は Mudus 等のモダリティ一般の作用域はレーマであるとしている。

8) Fuchs (1976 : 301) によれば、名詞句全体がレーマの場合、一番最後の要素が文アクセントを受ける。

9) Haftka (1981 : 757) によれば、このようなレーマ的なもののテーマ化はニュース文の始まりに典型的に現れるという。またここでの考察は幸田 (1983 : 65) を参考にした。

文献目録

- Daneš F. 1970 : Zur linguistischen Analyse der Textstruktur. In : *Folia linguistica* 4.
- Fuchs, A. 1976 : ‚Normaler‘ und ‚kontrastiver‘ Akzent. In : *Lingua* 38.
- Haftka, B. 1981 : Reihenfolgebeziehungen im Satz. In : Heidolph, E.K. et al. *Grundzüge einer deutschen Grammatik*. Berlin.
- Helbig, G. 1981 : Die deutschen Modalwörter im Lichte der modernen Forschung. In : *Beiträge zur Erforschung der deutschen Sprache* 1.
- Helbig, G./Buscha, J. 1984 : *Deutsche Grammatik*. Ein Handbuch für den Deutschunterricht. Leipzig.
- Hentschel, E. 1983 : Partikeln und Wortstellung. In : Weydt, H. ed. *Partikeln und Interaktion*. Tübingen.
- Lang, E. 1979 : Zum Status der Satzadverbiale. In : *Slovo a Slovesnost* 40.
- Lenerz, J. 1977 : *Zur Abfolge nominaler Satzglieder im Deutschen*. Tübingen.
- Petöfi, J.S. 1974 : ‚Modalität‘ und ‚topic-comment‘ in einer logisch-fundierten Textgrammatik. In : Dahl, Ö. ed. *Topic and Comment, Contextual Boundness and Focus*. Hamburg.
- Trojan, F. 1961 : *Deutsche Satzintonation*. Wien.
- Verhagen, A. 1979 : Focus, Core Grammar and Sentence Adverbials in Dutch. In : Van de Velde, M./Vandeweghe, W. ed. *Sprachstruktur, Individuum und Gesellschaft*. Tübingen.
- 井口 靖 1986 : 文の意味構造における Modalwort の位置付け. In : 『エネルギー12号』
- 岡田伸夫 1985 : 『副詞と挿入文』大修館書店.
- 幸田 薫 1982 : テーマ・レーマ構造と文アクセント. In : 『静岡大学教養部研究報告人文・社会編第18巻第1号』
- 幸田 薫 1983 : テーマ・レーマ構造と文頭の語順. In : 『静岡大学教養部研究報告人文・社会編第19巻第1号』

下川 浩 1979 : 文の配列とテーマ (その一). In : 『獨協大学ドイツ学研究第8号』

中右 実 1980 : 文副詞の比較. In : 『日英語比較講座 國廣哲彌編 第2巻文法』大修館書店.

テキスト分析の方法

——とくにテキスト機能をめぐって——

川島 淳夫

0. はじめに

テキスト言語学の対象としてのテキストは多くの場合いくつかの文の集まりを成している。しかし、単なる文の集合はテキストとはいえず、テキストはなんらかの意味でまとまりのある文の集合である。意味的、論理的首尾一貫性のある文の集合、統語的にもつながりのある文の集合である。(国語学の分野で「文章」、英語学の分野で「談話」、フランス語学の分野で「言述」と呼ばれているものもテキストと解される。) テキストは文を超えたレベルの単位で、文はテキストの構成要素である。また一文、一語あるいは、一句がテキストを構成する場合もある。しかし、ここでは新聞記事、手紙、広告など、いくつかの文の集合体からなるテキストの構成とその機能を考察の対象とする。

1. テキストの種類

コミュニケーションの手段としてのテキストは、そのサイズの大小を問わずなんらかのまとまりのある内容を持ち、それぞれ効果的に運用されている。新聞記事は新しい出来事を報道し、広告は新製品、催し物などを告知する。その内容のいかんに応じて、テキストは種々に区別される。内容が事実か虚構かによって、新聞記事、叙述文等に対し、小説、詩などの文学作品が区別され、表現手段の差異によって、話し言葉と書き言葉のテキストが区別される。話し言葉によるものとしては、談話、講演、演説、落語、等々が区別されるが、それらは言語的にも書き言葉と多少異なる要素を内包している。たとえば、日本語では終助詞が多用され、ドイツ語では心態詞が頻繁に用いられるという特徴を担っている。これらは話しの実現される場面と話しが話しの内容に対してとる態度と深くかかわっていると考えられる。コミュニケーションを円滑にするためのさまざまな試みがテキストの表面に現われるのである。ある場合には、発言者の確信が、ある場合には疑惑が、動詞の形態や不変化詞の使用などによって表わされ、テキストに色をそえる。それらはなんらかの形で文体に影響を与えるものとなる。そして種々のテキスト種類の発生の原因ともなる。厳正な学術書、購買意欲をそそる商業広告、情熱的な詩文、送別の言葉、弔辞、祝辞、気楽な談話、冗談、等々、テキスト種類はさらに文学上のジャンルのすべてを含み、多様である。

2. テキスト機能

テキストのいかんを問わず、すべてのテキストはコミュニケーションの場面で運用されなんらかの伝達機能を果している。これをテキスト機能という。テキスト機能については、GroBe (1976), Brinker (1983; 1985) などによって論述され、その分類が試みられている。GroBe (1976) は、テキスト機能はそのテキストに内包されている文の伝達機能の統計的傾向に求められるとしたが、Brinker (1983) は、テキスト内の諸種の文の伝達機能の中で、もっとも有勢なものをそのテキストのテキスト機能とした。たとえば、あるテキストに含まれる文が「叙述」、「叙述」、「依頼」という3つの機能を果す場合、「依頼」が有勢であれば、そのテキストは依頼文としての機能をもつと考えられ、統計的には叙述の部分が多いにもかかわらず依頼というテキスト機能をもったテキストと認定される。叙述の部分は依頼に至るまでの単なる状況説明、単なる前置きに過ぎないからである。

Searle (1975) (独訳 S.17-50) では、5つの発話行為 Repräsentative, Direktive, Kommissive, Expressive, Deklarative が区別され、Bühler のオルガノンモデル (1934) では記号の機能として3つの機能、すなわち, Darstellungs-, Ausdrucks- u. Appellfunktion が区別された。これらの先行理論の上にたって Brinker (1985) では、次の5つの基本的テキスト機能が区別されている。

1. 情報機能 Informationsfunktion
2. 訴求機能 Appellfunktion
3. 義務機能 Obligationsfunktion
4. 接触機能 Kontaktfunktion
5. 宣言機能 Deklarationsfunktion

具体的には以下の例によって見て行くことにしよう。

2. 1. 情報機能

情報機能は、次のパラフレズによって明確化することができる。

「私 (発信者) はあなた (受信者) に X という事態について情報を伝達します。」

ドイツ語のテキストで言えば、テキスト内に次のような動詞が含まれていると想定される。たとえば、informieren, mitteilen, melden, eröffnen, berichten, benachrichtigen, unterrichten 等々。多くの場合、発信者はテキストの内容について、自分の知識を不確かさから守るために何らかの制限を加えながら表現する。たとえば、「～だ」と言わずに、「～だそうだ」、「確か～だった」、「おそらく～だ」などの表現を執る。また、ラジオのニュースなどでは発信者自身による評価、感情的要素は極力避けられ、中立的な叙述様式が用いられる。日本語の例で言えば、「～ですね」、「～よ」、「～さ」といった終助詞は用いられない。ドイツ語では接続法第一式を用いて、発信者の発言ではないことを明示しながら報道することが多い。本来、あるテキストは正しい情報を伝達する任務を担っているが発信者は他人の言を間接的に伝達する際に、事実と異なる報道となることを恐れて、いわば自衛のため、接続法第一式や「恐らく」、「vermutlich」などの副詞、「～だそうだ」、「sollen」などの伝聞表現の助動詞を添えることに

なるのである。発信者自身が確実に知っていることについては、接続法第一式も用いず、また伝達動詞も用いないのがふつうである。

(1) Hiermit teile ich Ihnen mit, daß ich heil in Köln angekommen bin.

(2) Ich bin heil in Köln angekommen.

2. 2. 訴求機能

訴求機能は、次のパラフレーズで明確化することができる。

「私（発信者）はあなた（受信者）にXなる行為（または意見）を断行することを要求します。」

この訴求機能は、要求、命令を表わす動詞または助動詞（sollen, müssen）で表わされる。たとえば、auffordern, anordnen, befehlen, bitten, raten, empfehlen, fragen, beantragen, verlangen, beauftragen 等々。多くの場合、命令文の形をとるが、不特定多数の受信者に対しては不定詞構文が用いられる。

(3) Während der Fahrt den Fahrer nicht ansprechen.

(4) Kartoffeln schälen, fein würfeln und in gesalzenem Wasser kochen.

このほか、疑問文で要求を表わすもの、sollen, müssen : haben + zu 不定詞, sein + zu 不定詞で、または ich möchte ~, ich hätte gern ~, ich wünsche mir, daß ~ などで要求を表わすこともできる。

訴求機能をもったテキスト種類としては、商業広告、プロパガンダ（宣伝文）、説明書、処方箋、願書、請願書、法文、説教などがある。広告文は、「私はあなたがXなる製品を購入することを要求する」という明示的の遂行文で書かれることはないにしても、すべて何らかの意味で消費者（受信者）に製品の購入を求めている。新しい製品、良質の製品、便利な製品、安い製品の出来を示す文は消費者の購買意欲をそそるものである。Neu! Qualitäts ~! などの表示は、新製品の登上市を示すばかりでなく、「新しいものが出来ましたから、買って下さい」というに等しい。少し長文だが、ドイツの電気関係の会社 Stiebel Eltron の広告を見よう。

(5) Unter der Dusche sind Mühen des Umzugs schnell vergessen. Denn jetzt wird der Warmwasser-Komfort groß geschrieben: Ganz gleich, wie viele Warmwasser-Zapfstellen in ihrem Haushalt sind. Denn der kluge Hausbesitzer hat auf Marken-Geräte gesetzt. Auf Stiebel Strom : qualitativ hochwertige Geräte- und Armaturenprogramme für mehr Komfort und weniger Energieverbrauch.

Gleiches gilt für die Geräteprogramme für warmes Wohnen. Auch sie bringen wohlige Wärme, ohne unnötig Raum und Energie zu verschwenden. So unterschiedlich Ihre Räum-

lichkeiten sind, so problemlos und sauber sind die Lösungen von Stiebel Eltron. Fragen Sie Ihren Fachhändler. Er berät Sie auch, wie 10% der Kosten bei einer Modernisierung mit Stiebel Eltron Geräten und deren Einbau 10 Jahre lang steuerlich abzusetzen sind und empfiehlt die für Sie optimale Energieart.

Denn die Stiebel Eltron Geräteprogramme können mit Strom, Gas, oder Umweltenergie/Solar betrieben werden. Ob Sie nun eine Wohnung oder ein Haus Ihr eigen nennen, ob Sie renovieren, modernisieren oder neu bauen, Sie können sicher sein: Die Wärme kommt mit Stiebel Eltron. (Stiebel Eltron GmbH & Co. KG Abt. SP-15, Dr.-Stiebel-Str. 3450 Holzminden 1) (Aus: Wochen-Anzeiger Duisburg 1987)

この広告文には Stiebel Eltron という社名が頻繁に用いられ、「温かさはシュティーベル・エルトロンと共にやってくる」と結ばれている。そしてそこには、qualitativ, hochwertig, Komfort, problemlos, wohlig, sicher などの良質を示す形容詞や名詞が散在している。消費者に対しては, der kluge Besitzer という表現を用い, 快適さとエネルギーの消費に関しては, mehr Komfort und weniger Energieverbrauch と対比的に叙述している。また, 専門店でお尋ね下さいと書いて, 消費者を引きつけようとする。広告文の最後を締めくくる文 “Die Wärme kommt mit Stiebel Eltron.” は会社名を売り出すものであり, 同時に同社の製品の購入を求めるものである。明示的な文に書き替えるならば, “Ich fordere dich auf, das Produkt von Stiebel Eltron zu kaufen, da die Wärme mit Stiebel Eltron kommt.” となるであろう。広告文は, 社名を売るか社の製品を広く知らしめ, 購買を求める以外に目的はないからである。広告文こそ訴求機能を最大に発揮したものと言うべきであろう。

2. 3. 義務機能

われわれは何らかの発言をしたために, その実現を義務づけられることが往々にしてある。そのもっとも一般的な形式は約束である。書式によるものとしては, 始末書や契約書がこれに属する。図式的に言えば,

「私 (発信者) は, (受信者に対して) Xなる行為をすることを自分自身に義務づけます」ということになる。この種のテキスト種類は何らかの手続きを踏むことによって, より一層義務遂行の効果を生じるものが多い。契約, 協定, 婚約, 誓約等々, 社会的に一定の慣用に従うもの, 法的手続きによるものなど, 第三者の介入をもって有効になるものがそれである。その際, ドイツ語では, 明示的な遂行文を伴うことが少くない。動詞としては, versprechen, sich verpflichten, schwören, übernehmen, sich bereit erklären, garantieren, sich verbürgen, wetten, anbieten などがある。助動詞の sollen もこれに加えられる。発言者が自らの言について, 責任を負う義務があるので, 万一, 遂行できない事態が生じた場合は, その責めを負うか, 何らかの形で謝罪することを要求される。現実の言語生活においては, 義務機能をもつテキストは随所に見られ, 義務的行為が遂行されることによって, 言語の存在理由が確認されるのである。ただし, 政治家の発言の中には, 偽似義務機能的テキストを巧みにあやつるも

のがあり、受信者の期待を裏切る結果となるものも少くない。たとえば、「何々の実現をはかります」と言わず、「何々の実現をはかるよう努力します」という。「何々を実現します」と言えば、これは完全な約束であり、実現の義務を買うが、「～をはかります」、「～をはかるよう努力します」は実現の義務はなく、「努力する」義務にとどまる。更に欺瞞的な表現は、「～をはかるべく努力する考えであります」といったもので、これは「実現」とはほど遠い義務機能をもったテキストである。

2. 4. 接触機能

言語が人間の社会生活を円滑にする機能を有するとすれば、これはまさにこの接触機能にあるといっても過言ではない。早朝から深夜まで、人が顔を合わせれば、挨拶の言葉を交わし、遠方の人に書簡・絵葉書を送るのは、情報伝達よりも前に人的接触を求めているからにほかならない。この意味でテキストの接触機能は人間生活の円滑油であると言ってよい。具体的には、Guten Morgen, Danke, Bitteなどの慣用句に始まり、danken, um Entschuldigung bitten, beglückwünschen, gratulieren, sich beschweren, willkommen heißen, Beileid aussprechen, verfluchenなどの動詞(句)によって、テキストの接触機能が発揮される。これらの動詞の表わす交話的要素は、テキストの生産される本源的な要因をなすと言えよう。感謝状、献辞、送る言葉などは一定の形式にはまったテキストで、接触機能をもったテキストの書記形式であり、挨拶はその談話形式である。学会などで、口頭発表者が“*Ich danke Ihnen für Ihre Aufmerksamkeit.*”と言い、司会者が、“*Ich danke Ihnen für Ihren interessanten Vortrag.*”というのまさに接触機能の現われであるといえよう。

2. 5. 宣言機能

開会宣言、婚約の表明、告示、宣戦布告等々、ある発言が行なわれてはじめて、ある事が運ぶ、ということがある。「ただ今より、第X回市民運動会を開会します」という市長の発言によって運動会が始まり、「これをもって閉会します」で会は終るのである。公式の会はすべてこの種の儀式で始まり、終結する。言語がテキストとして宣言機能を十分に果すことによって、ここでも人間生活が円滑に流れるのである。公式会議において、議長が選出されるのも、議事の進行のみならず会の開始と終了を合図する役目を担う人が必要だからである。いわゆる井戸端会議は宣言機能をもったテキストを伴うことなく、また、自然発生的談話も、自然消滅するのを特徴とする。

宣言機能をもったテキストには、このほか遺言や証明書などがあり、これもまた義務機能テキストと同様、法的手続きの裏づけが要求される。ドイツ語では、*hiermit bewirke ich, daß ~* : *hiermit bescheinige ich, daß ~* ; *hiermit bevollmächtige ich, daß ~*, などの形式によって公的宣言がなされる。任命書などでは、宣言主体を明示しない場合、受動態が用いられる。

(6) Herr Schmidt wird zum wissenschaftlichen Rat ernannt.

3. テキスト機能の認定

さて、現実のテキストがいかなるテキスト機能を担ったものであるかは、容易に認定し得るものではなく、ときには発信者の意図と必ずしも一致することなく、受信者の解釈に委ねられている。受信者の解釈は、しかし、恣意的なものではなく、テキストに内在する諸契機によって条件づけられているのである。また、テキストのサイズの大小によっては、テキスト機能が単一のものではなく、上記の5つの機能の組み合わせであることも稀ではない。俳句のような短小テキストから長編小説のような巨大テキストに至るまで、すべてのテキストは、それ自体ひとつの記号として、テキスト機能を担っている。いかなるテキスト機能を当該テキストが担っているかを感じ得るのは、受信者（読者、聞き手など）の任務である。

テキストの発話内的行為の受けとめ方が、受信者の文化的知識、言語的知識等に左右されることは避けられないとしても、テキストの言語的構成に立脚した平均的解釈の可能性がある筈である。それなくしては、言語的交流は不可能であると言わざるを得ない。

以下、具体的なテキストに当って、テキスト機能の発現の仕方を見てみよう。まず料理の調理法に始まり、結婚広告、恋文、文化記事、対談の順でテキスト例を挙げることにする。

(7) Hackfleisch mit der sehr fein gewürfelten Zwiebel, 1 zerdrückten Knoblauchzehe und etwa 1/3 der sehr fein gehackten Petersilie und dem Ei gut vermischen. Mit Salz, Pfeffer und Cayennepfeffer würzen und zu walnußgroßen Kugeln formen. In Mehl wenden, im heißen Öl 5-6 Minuten braten. (...) (Aus: "Suppen und Eintöpfe" München: Burda 1983, S.12)

(8) Ich heiße Karin, 21 Jahre jung, habe braune Haare und braune Augen. Da ich etwas schüchtern bin, suche ich auf diesem Wege einen lieben, ehrlichen und treuen Partner. Du brauchst nur anzurufen. Tel. 02151/66585, Institut Globus, 4150 Krefeld, Blumenstr. 62, tägl. von 11:20 Uhr, auch Sa. u. So. (Aus: Wochen-Anzeiger Duisburg. 9. Jg. Nr. 55-11. Juli 1987)

(9) Ich bin noch gar nichts und muß erst werden, was ich werden will, und bin dazu ein unansehnlicher armer Bursche, also habe ich keine Berechtigung, mein Herz einer so schönen und ausgezeichneten jungen Dame anzutragen, wie Sie sind, aber wenn ich einst denken mußte, daß Sie mir doch ernstlich gut gewesen wären und ich hätte nichts gesagt, so wäre das ein sehr großes Unglück für mich, und ich könnte es nicht wohl ertragen. Ich bin es also mir selbst schuldig, daß ich diesem Zustande ein Ende mache, denn denken Sie einmal, diese ganze Woche bin ich wegen Ihnen in den Wirtshäusern herumgestrichen, weil es mir angst und bang ist, wenn ich allein bin. Wollen Sie so gütig sein und mir mit zwei Worten sagen, ob Sie mir gut sind oder nicht? Nur damit ich etwas weiß: aber um

Gotteswillen bedenken Sie sich nicht etwa, ob Sie es vielleicht werden könnten? Nein, wenn Sie mich nicht schon entschieden lieben, so sprechen Sie nur ein ganz fröhliches Nein aus und machen Sie sich herzlich lustig über mich; denn Ihnen nehme ich nichts übel, und es ist keine Schande für mich, daß ich Sie liebe, wie ich es tue. Keller an Luise Rieter, 16. Oktober 1847. (Aus: Adolf Muschg, Gottfried Keller. München: Kindler Verlag 1980, S.226)

(10) Erst kürzlich hat man gezeigt, daß die Japaner, wahrscheinlich wegen einiger Besonderheiten ihrer Sprache, Laute nicht in derselben Weise wahrnehmen wie Menschen, die eine andere Sprache sprechen (darunter auch solche, die dem indogermanischen Sprachraum angehören). Ein japanisches Gehirn lateralisiert die vom Ohr aufgenommenen Laute nicht so wie ein europäisches. Anscheinend ist die linke Hirnhälfte weniger stark auf sprachliche Funktionen spezialisiert: Neben anderen Unterschieden zeigt sich, daß sie auch natürliche Geräusche verarbeitet, während dafür beim europäischen Gehirn die rechte Hälfte zuständig ist. (...) (Aus: "Japan und der Westen", hrsg. von C. von Barloewen und K. Werhahn-Mees. Frankfurt/M: Fischer Verlag 1986, S.23)

(11) Vormweg: Ich bin ganz unsicher, wie ich beginnen soll, und wenn ich dieses Gespräch überhaupt riskiere, dann einmal in der Hoffnung, daß Sie, Heinrich Böll, ihm sehr viel mehr Inhalt geben, als ich es könnte. Zweitens aber auch weil ich damit wohl eine durchaus repräsentative Rolle übernehme. Obwohl ich einiges gelesen habe und gelegentlich, allerdings ganz vom hiesigen Standpunkt aus, ohne irgendeinen objektiven Anspruch, über Literatur aus der Sowjetunion geschrieben habe: eines ist ganz sicher, ich habe zu wenig gelesen, und ich weiß zu wenig. Ganz ähnlich, wie Alfred Andersch das in seinem offenen Brief an einen sowjetischen Schriftsteller dargestellt hat. Wie kommt das? (...) (Aus: Heinrich Böll/Heinrich Vormweg: Weil die Stadt so fremd geworden ist. München: dtv 1987, S.50)

テキスト機能を分析するための資料は、身近に無数にあるが、テキスト種類によって資料を限定する必要がある。たとえば料理の説明書などは、ドイツ語のテキストとしてはきわめて特異な形式、すなわち不定詞構文という形で書かれており、その説明に従って料理をすれば、なんらかの料理が結果として完成する。模型の組立説明書、道の案内なども、説明に従えば一定の結果に到達するという実際的な、あるいは実用的な性格をもっている。例文(7)はまさにその典型で、情報機能と訴求機能を合わせもっている。各文は不定詞構文であるが、要求文と考えられる。これは接続法第一式で表わし、Braten Sie 5 Minuten,あるいは、Man brate 5 Minutenなどの等価であるが、不定詞の使用によりはるかに簡潔なものとなっている。薬剤の使用説明書などもこれと同様、不定詞のみのものが多い。

(12) Mehrmals tgl. 1-3 Tropfen in das Auge träufeln.

(13) 2-3 mal täglich einen 1cm langen Salbenstreifen in den Bindehautsack oder die Nasenschleimhaut einstreichen.

これらの不定詞句は、内容的には一つの文に相当するもので、必要とあらば、これらの文相当句前に Sie sollen を補うことによって、完全文に変形することができる。例文(7)は、従って、3箇の文からなるテキストと等価であると言える。すなわち、書き手の「要求」が各文に含まれ、その総和もまた「要求」である。従って、このテキストの機能は要求機能であり、Brinker のいう Appellfunktion に内包される機能を果しているということができよう。

これと同様に、例文(8)も、ich heiße so und so, ich suche so und so という情報機能をもった文に続いて、du brauchst nur anzurufen という要求をしている。これは du sollst mich anrufen と言い替えてもよい。そしてこの要求が、有勢であるので、これがこのテキストのテキスト機能と認定される。この機能が有効にはたらくための付随的要件として、宛名と電話番号が付加されている。これは本の広告などと共通する広告要件である。

次に青春時代の G. ケラーの恋文が問題となる。これも主体の表明としての ich が一方的に多数使用され、広告を出した少女とは少し異なり、堂々と(?)自分の気持を打ち明け、相手の気持を確かめようとして、Sie の使用はいくぶん抑えられている。前半はケラー自身についての控え目な叙述。そして、その上に立って相手の気持を確かめようとする中心的な言葉がテキストの山場に出てくる。“Wollen Sie so gütig sein und mir mit zwei Worten sagen, ob Sie mir gut sind oder nicht?” この疑問文は発話行為理論で言うところの発語内的行為「要求」そのものを表わすもので、「自分を愛しているかどうか言って下さい」と「要求」しているが、これに続く文章は、この要求が強要するものでないことを示し、相手への配慮を示している。これに対する答えが、「否」であったかどうかは、ケラーもリーター嬢ともに生涯独身を通したという事実から判断するほかはない。

続いて学術的書物からの引用として、『日本と西洋』の一節をとりあげよう。例文(10)は(…)が示すとおり完結したテキストではない。これは Augustin Berque の「日本文化における空間と時間に対する経済の関係」という論説の第二節で、さらに次の数行が続く。

(14) Wenngleich die Zahl der Experimente noch zu gering ist, um weiterreichende Schlüsse zu ziehen, so zeigen sie doch mit einiger Sicherheit, daß das Verhältnis zwischen dem Subjekt und der Außenwelt nicht in allen Kulturen dasselbe ist und daß diese Unterschiede schon auf neurophysiologischer Ebene anzutreffen sind. Der für logische Aktivitäten zuständige Bereich—die linke Hälfte, in der die Selbstdefinition des Subjekts als rationales Wesen begründet ist—scheint bei der Japanern besonders empfänglich für äußere Eindrücke zu sein. (S.23-24)

これは日本文化と西洋文化の差異を説明するのに、日本人の脳と西洋人の脳との知覚上の差異を取り上げたものである。例文(8)、(9)と比較してまず特徴的なのは筆者が前面に出ることなく、従って一人称の代名詞 ich は一度も用いられず、わずかに man hat gezeigt, anscheinend, scheinen などの語句によって、いくつかの文が筆者とのかかわりを示しているにすぎない。学術的な文書においては、個人の体験よりは客観的な事実の記載が重視されるので、「私は～と思う」と言わず、「～と思われる」(=scheinen) や「私は読んだことがある」の代わりに「～が示された」(=man hat gezeigt) などの表現が使われている。このように学術書の文章は、「私」という個人よりは、「私」のない受動態や scheinen などの Modalitätsverb を用いて客観性を高める傾向をもっている。この種のテキストは、従って、個人の意見ではなく、客観的事実の報告、ないしは情報の伝達という点にその本領がある。

これに対し、次のテキスト(11)は、ハインリヒ・ベルとハインリヒ・フォルムヴェークとの対談で、フォルムヴェークがソヴィエト文学についてベルの見解をただすというくだりである。対談であるから兩人とも「私」をつねに前面に出して語っている。それと共に内容は客観的事実よりは、諸文化的事実、文学上の諸問題に対して、ベルがどういう見方をしているかをフォルムヴェークが聞き出そうとするものであるが、しかし、単にインタビューをするというのではなく、自分の見解をまず述べて、それへの反論を期待するといった司会者の役目を果している。そのため、フォルムヴェークの会話は、常に疑問文を伴って、ベルの回答を求める形をとる。また、ソヴィエト文学について書いたことはあるが、自分としてはあまり読んでいないということを告白している。いっぽう、ベルのほうもフォルムヴェークの様々な質問に対して、自分もロシア語はできず、翻訳を通じてソヴィエト文学を知っているにすぎない旨断った上で意見を述べている。

(11) Böll: Zunächst muß ich eine große Einschränkung machen: Ich kann nicht Russisch lesen, kann nicht Russisch sprechen. Ich bin also, wenn ich über russische oder sowjetische Literatur rede, angewiesen auf das, was übersetzt wird, das, was mir empfohlen wird in der Sowjetunion und was greifbar ist hier, und dieser Prozeß der Auswahl entscheidet mit darüber, was man erfährt von der Literatur eines anderen Landes, etwa auch von der amerikanischen. (...) Ich habe 1945 oder 1949 als erstes sowjetisches Werk den Kriegsroman "In den Schützengräben von Stalingrad" von Nekrassow gelesen, ein eindrucksvolles Buch, weil es das Kriegserlebnis der sogenannten anderen Seite—ich meine nicht der feindlichen Seite, ich habe die Sowjetunion nie als meinen Feind betrachtet—auf eine Weise schildert, die unserem Erlebnis sehr nahe war. (...)

この対談は1977年10月に行なわれたもので、dtv (1987) 文庫本の50頁～68頁に再現されているが、フォルムヴェークの質問は随所に見られ(疑問文16箇所)、彼の発言は質問で終る。いっぽう、ベルのほうは、フォルムヴェークの意見に同意するといった形の Ja, あるいはそれに対する否定としての

neinを用いて発言を開始する。要するに当然のことながら、両者間で“Frage und Antwort”の対談をかわし、全体として読者に対し、ベルのソヴィエト文学に対する態度を引き出して見せたもので、対話テキストとしては情報機能を、部分テキストとしてのフォルムヴェークの発言は訴求及び接触機能を果たしている。読み物としては、ベルがソヴィエト文学をどのように知り、それについてどんな見解をいっているかを引き出した点が興味あるものとなっている。

以上、少数ながら数種の異なるテキスト種類によって、テキスト内でテキスト機能がいかに発揮されているかを見て来たが、きわめて印象的な記述にとどまっている。しかし、実際は一定のテキストを分析するには、当該テキストを各文に分解し、それぞれの文の機能を確認し、それらの中でどの文の機能がテキスト全体の機能として解釈されるかという手順を経なければならない。私見によれば、テキスト機能は、一つのテキストに一つと限定されることなく、いくつかの山をなす中心的テキスト機能ないし有力テキスト機能が複数存在することもありうるのである。あるテキストがいかなるテキスト機能を果たすかは、テキスト内在的要素とテキストの現われる環境（コンテキスト）を手がかりとして受信者が解釈することによって決定されるものである。そして、発信者の意図とテキスト機能は必ずしも一致するとはかぎらないのである。

文 献

- Barloewn, Constantin von & K. Werhahn-Mees (1986) : *Japan und der Westen*. Frankfurt/M : Fischer Taschenbuch Verlag.
- Böll, Heinrich & Heinrich Vormweg (1987) : *Weil die Stadt so fremd geworden ist ...* München : Deutscher Taschenbuch Verlag.
- Brinker, Klaus (1983) : Textfunktion. Ansätze zu ihrer Beschreibung. In : *ZGL* 11, S.127-148.
- Brinker, Klaus (1985) : *Linguistische Textanalyse*. Berlin : Erich Schmidt Verlag.
- Große, E.U. (1976) : *Text und Kommunikation*. Stuttgart : Kohlhammer.
- Jäger, Siegfried (1987) : Was ist ein Text? In : *Flaschenpost*. Nr. 2 (1987), S.26.
- Kawashima, Atsuo (1987) : *Studien zur germanistischen und kontrastiven Linguistik*. Tokyo : Dogakusha.
- Muschg, Adolf (1980) : *Gottfried Keller*. München : Kindler Verlag. (1977). (=suhrkamp taschenbuch 617)